

一般社団法人 日本生態学会

ニュースレター

No.65

2025年1月

第22回 男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに参加して…………… 1

記事

I. 学会各賞受賞者決定…………… 4

II. 書評依頼図書…………… 4

III. 寄贈図書…………… 4

IV. 地区会報告…………… 4

書評…………… 17

京都大学生態学研究センターニュース…………… 24

第 22 回 男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに参加して

シンポジウムテーマ

女子中高生の進路選択

～環境にとらわれず自分の興味を伸ばせるように～

キャリア支援専門委員会

河内香織・半場祐子・池本美都・木村恵・三宅恵子・曾我昌史

2024年10月12日(土)、第22回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム「女子中高生の進路選択～環境にとらわれず自分の興味を伸ばせるように～」が中央大学茗荷谷キャンパス特大教室(1W01)および、オンライン(Zoom Webinar)にて開催された。日本生態学会は正式加盟学会として2007年度から本シンポジウムに毎年参加している。日本生態学会からは男女共同参画理事の木村、キャリア支援専門委員会から半場、池本、三宅、曾我、河内が参加した。また、個人でも参加できるように会員にも広く情報を提供した。2016年度から、一般会員に対して本シンポジウムの参加費と交通費を支援しているが、今年度の一般参加者はオンラインの参加であったため、支援は行われなかった。

午前の部(10時～11時半)は「多様な出会いが拓く未来:アンコンシャスバイアスを超えて～男女共同参画学協会連絡会に支えられた、女子中高生夏の学校(夏学)の20年～」というタイトルで開催された。永合由美子氏(NPO法人女子中高生理工系キャリアパスプロジェクト代表理事)が登壇され、これまで20年に渡り行われてきた女子中高生向けの理工系キャリアパスイベントである夏学について紹介された。このイベントは学協会連絡会とのパートナーシップに基づき、女子中高生が理工系キャリアについての知識を獲得したうえで、自らの意思に基づいて進路を選択できるようになってもらうことを目的として行われているものである。生態学会も講師派遣やポスター展示を定期的に行っている。講演では理系進路を具体的に考えられるようになったという参加者の感想が紹介され、一定の成果が示されたほか、更なる広報活動の必要性や地方での開催に向けた課題も紹介された。

11時半からのポスターセッションでは各団体の活動を報告する30題のポスターが掲示され、情報交換がなされた。日本生態学会のポスター発表も行い、これまでの

男女共同参画に関する活動を紹介した。学術大会での託児室はこれから設置したいという学会も多く、利用状況やファミリー休憩室に関する質問が多くみられた。



写真1 ポスター会場

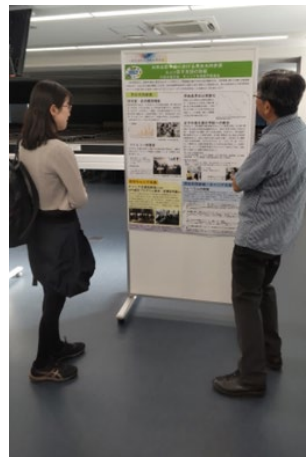


写真2 ポスター発表の様子

午後の部(13時～16時半)は、「女子中高生の進路選択～環境にとらわれず自分の興味を伸ばせるように～」というタイトルで開催された。来賓として、岡田恵子氏(内閣府男女共同参画局 局長)より以下の挨拶があった。「今回のシンポジウムが女子中高生の進路選択、特に地方の課題に焦点を当てて女子中学生が自分の興味を伸ばせる環境構築の方策について共に考える機会となることは大きな意義があるものと考えております。政府としては2024

年6月11日に女性版骨太の方針2024を策定いたしました。具体的には若手のロールモデルによる事業の実施手順の事例などを示したプログラムを作成また周知することによりまして、理工系の魅力を発信する機会の増加や初等中等教育段階からの児童生徒・保護者・教員を含めた理系分野への進路選択を促進する意識啓発の推進に取り組むこととしております。

内閣府男女共同参画局における理工系分野にかかる取り組みとして、理工系分野の進路の魅力やキャリアに関する情報発信などを行う取り組みを理工チャレンジ(リコチャレ)として推進しております。今年の夏休みに開催したリコチャレでは119団体により228のイベントが開催され昨年よりさらに多くの約6,800名以上の女子中高生などが理工系の進路に触れる機会を作ることができました。内閣府といたしましては今後も関係省庁と連携してこうした女子中高生等に対する理工系分野の進路選択の支援を進めるとともに科学技術学術分野における女性の参画拡大や女性研究者・技術者の活躍できる環境の整備などにより理工系女性人材の裾野の拡大と女性の登用の促進を進めてまいります。

もう一名の来賓である先崎卓歩氏(文部科学省科学技術・学術政策局 科学技術・学術総括官)より以下の挨拶があった。「我が国が今後成長を続けていくうえで、理工系分野の専門性を持った女性を育成していくことは大変重要な課題であると認識しております。教育未来創造会議の第1次提言「我が国が未来を牽引する大学等と社会のあり方について」において、大学・学部の女性入学者に占める理工系分野への比率がOECD平均に比べても大幅に低い状況にあることから、理工系分野を専攻する女性が増加する取り組みを始めとして、あらゆる分野で女性が自らの能力を発揮できる社会を産学官が一体となって作り上げていくことが提言されました。文部科学省としては初等中等教育段階において、女子中高生の理系進路選択肢プログラムとして地域や企業と連携し研究者等との交流機会を提供するシンポジウムや出前事業の取り組みなどを実施する大学等を支援しております。理工系分野の女性活躍の推進は、多様な視点や優れた発想を取り入れ我が国の科学技術イノベーションを発展させるために不可欠であります。様々な活動において男女共同参画を推進されていることは我が国のイノベーションの発展において大変意味のあるものと思います。引き続き、女子児童・生徒・保護者および教員に対し、理工系選択のメリットに関する意識啓発や理工系出身者のキャリアに関する理解を促すための環境整備を積極的に進めてまいりたいと考えておりますので皆様の引き続きのご理解とご支援を賜りますようお願い

願ひ申し上げます。」

続いて講演1では、教育社会学を専門とする寺町晋哉氏(宮崎公立大学准教授)より、「女子中高生の進路選択をとりまくジェンダー」と題して、中高生の大学進路選択における現状と進路選択において性差が生じる社会的背景についての説明がなされた。寺町氏は多くのエビデンスを提示し、理系の学部に進学する女子学生が少ない原因は、「理系は男子」という社会の価値観に起因する(1)女子学生自身の理系科目に対する苦手意識の高まりと(2)無意識のうちにジェンダー意識を強化してしまう現在の学校教育システムにあると主張していた。そのうえで、これら二つの原因に対処するためには、理系に対するステレオタイプ的な価値観を除去するための教育や理科教育を行う際に女子に身近な材料を用いる等の具体的な実践方法が提案されていた。

講演2では、細越裕子氏(大阪公立大学 大学院理学研究科 物理学専攻 教授/女子 STEAM 人材育成研究所(CYWSTEAM) 所長)より、関西地区で行なっている「女子中高生のための関西科学塾」の活動報告があった。この取組は2006年度に文科省の支援で始まり、今年で19年目を迎えている。関西圏の複数の大学が連携し、年間を通じてさまざまな行事を実施しており、参加者は毎年約400人(のべ700人程度)に上る。2014年度以降行なっている参加者の進路追跡調査では、8割が理系分野を選択し、その6割が理工系に進学していることが確認された。さらに、OG会の活動や英語を取り入れた新たな取り組みを展開している。近年、保護者懇談会の参加割合が父親と母親でほぼ同数になり、活動の成果とともに、進路選択における多様な影響が現れていることが紹介された。

講演3では、朝井都氏(大阪大学 大学院医学系研究科 特任研究員/(株)リコー)より、「女子中高生理系進路選択支援プログラムが与えた影響:夏学での経験」について話題提供がなされた。地方出身の朝井氏は午前の部でも紹介された夏学イベントに参加したことがきっかけで、電気系の分野を学ぶために大学に進学を決めた事例が紹介された。また、大学進学後は夏学イベント運営に携わった経験に後押しされながら大学院進学や研究職を目指すことができたと話されており、様々なキャリアのメンバーとの知り合える、こうした「場」の重要性が示された。

講演後は、登壇者、森義仁氏(お茶の水女子大学教授/女子中高生理系進路選択支援WG 委員長)、佐藤南帆氏(九州大学修士課程1年)、およびファシリテーターの中口悦史氏(連絡会第22期運営委員会副委員長)によりパネルディスカッションが行われた。

ディスカッションの中では幾つか問題提起がなされた。

女子学生が理系を選択する場合、「あえて理系を選ぶなんて、そんなに勉強して一体何者になるつもりなのか？」という周囲の困惑が（特に大学進学者の少ない地方では）大きいため、明確な将来像を求められる傾向があり、実際には理系の方が将来の職業選択の自由度は高いという実態が理解されていないという指摘があった。また理科の科目を教える先生の影響が子どもにとっては大きい、高等教育としての理系の専門教科を持つ教員が少なくなっており、教員自身が理系科目に苦手意識やジェンダーバイアスを持っていることが悪影響を及ぼしているのではないかと、等の声が挙がった。その他理系教育の難しさとして、中学校に入ると途端に授業への反応が薄くなることや、理系職のイメージが湧きにくいのではないかとという指摘があった。アメリカでは、單元ごとにそれが社会でどのように役立つか記載されているとの情報提供があり、我々もそういった教科書を作れないだろうかという意見が出た。

教育委員会との連携の難しさに関しても何度か話題に上った。知り合いの教員とのコネクションを利用するという案もあったが、教育委員会にどこまで連携する（頼る）必要があるのか？逆に人材を送り込むというのも手ではないか、等の意見が挙がった。

地方の女子教育についても話題が広がり、地方は女子向けの教育イベントが少なく、また新聞などのメディアもジェンダー意識が低いことが指摘されたほか、子どもに勉強を教えたら賢くなり町を出ていく、だから勉強を教えないでほしいという声が保護者からあることが紹介された。その他、高校での進路指導の在り方が大学進学に影響を与えるかもしれないという意見が挙がり、例として進路選択時に女性には工学系は厳しいかもしれないからと、農学系を進められた事例について紹介された。進路指導の先生のバイアスによって進路が変わる可能性があることも指摘された。また、進路に関わる教員側の課題として、学校の先生は企業や研究職として働くことについてイメージできていないケースが多い。進路指導の担当は各校で頻繁に変わるため、啓発することも難しい。先生自身が視野を広げてもらうしかないだろう、という意見が出た。こうした状況のなか、夏学のように地方の女子生徒が大学や企業関係者と交流できる機会はなくてはならないということが再確認された。一参加者として、いずれの話題についても解決していくのに時間がかかりそうな課題が含まれており、日本の将来の学校教育について不安を感じた。



写真3 講演者らによるパネルディスカッション

最後に幹事学会からの挨拶として今井桂子氏（連絡会第22期運営委員会委員長）、および次期幹事学会からの挨拶として佐藤宣子氏（日本森林学会）が登壇したのち終了した。

今回の講演の詳細については学協会連絡会 HP (<https://www.djrenrakukai.org/symposium1.html>) に掲載された報告書もご参考ください。

記事

I. 学会賞受賞者決定

第23回日本生態学会賞

大手 信人 (京都大学大学院情報学研究所)

陀安 一郎 (総合地球環境学研究所)

第29回日本生態学会宮地賞

阪口 翔太 (京都大学大学院人間・環境学研究所)

曾我 昌史 (東京大学)

宮川 一志 (宇都宮大学バイオサイエンス教育研究センター)

第18回日本生態学会大島賞

受賞者なし

第13回日本生態学会奨励賞 (鈴木賞)

大崎 晴菜 (東京都立大学)

柴崎 祥太 (国立遺伝学研究所)

高橋 大樹 (九州大学大学院農学研究院)

第2回日本生態学会自然史研究奨励賞

大館 智志 (北海道大学低温科学研究所)

林 亮太 (日本工営株式会社中央研究所)

第23回日本生態学会功労賞

久保 拓弥 (北海道大学)

松田 裕之 (横浜国立大学)

宮下 直 (東京大学)

II. 書評依頼図書 (2024年5月～2025年1月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局(office@esj.ne.jp)までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 宮竹貴久著「特殊害虫から日本を救え」(2024) 256pp. 集英社 ISBN:978-4-08-721317-1
2. 広岡靖明編著・根本緑著「ADAPTATION アダプテーション [適応] 気候危機をサバイバルするための100の戦略」(2024) 400pp. 山と溪谷社 ISBN:978-4-635-31048-2
3. 小池伸介・北村俊平編著「タネまく動物」(2024) 152pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-7255-7
4. 「科学 2024年9月号 絶滅危惧種の再導入をめぐる動向と課題」(2024) 96pp. 岩波書店 ISSN:0022-7625
5. 種生物学会編「タイムカプセルの開き方 博物館標本が油ぐ生物多様性の過去・現在・未来」(2024) 248pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-6212-1
6. 白藤梨可・八田岳士・中尾亮・島野智之(編著)「マダニの科学—知っておきたい感染症媒介者の生物学—」(2024) 228pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17194-5

7. 佐藤幸恵・鈴木丈詞・笠井敦・伊藤佳・大井田寛・日本典秀・島野智之(編著)「ハダニの科学—知っておきたい農業害虫の生物学—」(2024) 248pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17193-8

8. Tom Leinster 著 春名太一訳「エントロピーと多様性の数理」(2024) 472pp. 森北出版 ISBN:978-4-627-08291-5

III. 寄贈図書

1. 「公益財団法人鹿島学術振興財団第48回2023年度年報」(2024) 449pp. 公益財団法人鹿島学術振興財団

IV. 地区会報告

北海道地区会

2023年度地区会報告 (2023年4月1日～2024年3月31日)

(1) 2023年北海道地区大会・総会の実施

日時：2023年12月9日(土) 9:00～15:00

場所：Zoomによるオンライン開催

参加者：48名 (事前登録者+発表者)

概要：口頭講演8件 (若手の部が8件、一般の部が0件)。ポスター講演はなし。「若手の部」発表者の中から毎回数名に若手研究奨励賞が贈られている。5名の審査員による判定の結果、本年度は、榛沢日菜子氏 (北大・理学院)および近昌美氏 (北大・水産科学院)に若手研究奨励賞 (賞状および副賞) を授与した。

講演者及び演題

[口頭講演]

「Community structure of Asteroidea in the intertidal area of Suli, Baguala Bay, Maluku.」Gratia Dolores Manuputty (北大・院農)

「ヤマトツジにおける葉の局所集中的な食害が繁殖に及ぼす影響」高橋佳吾 (北大・環境科学)

「夜行性フクロウの体色研究—リュウキュウコノハズクの2系統間・島間比較からみえてくること—」榛沢日菜子 (北大・院理)

「雌雄同体のフジツボはフクロムシの寄生により性配分を変えるのか」為近昌美 (北大・水産)

「大規模な人為的攪乱がササの形質変化を介して枯葉の分解と森林棲両生類に及ぼす影響」長崎夕 (小樽商大・商)

「大型有蹄類死体が森林土壌微生物群集の分解機能へもたらす効果～森林タイプに対する応答と腐肉食性昆虫の影響～」高木惇司 (北大・環境科学)

「岩礁潮間帯固着生物群集における2種系(イワフジツボとフクロフノリ)の種間相互作用の環境依存性」姚遠(北大・環境科学)

「ショウジョウバカマ(シユロソウ科)の繁殖特性の地域間比較」中林楓 (北大・環境科学)

(2) 講演会の開催

タイトル「長期観測からわかる樹木・森林の動き」(日本生態学会北海道地区会主催)

日時：2023年10月14日(土) 13:30-16:20

場所：北海道大学大学院地球環境科学研究院 D201 講義室
(札幌市北区北10条西5丁目)

スケジュール：

13:30～13:35 講演会挨拶(日本生態学会北海道地区会長 工藤岳)

13:35～14:50 原登志彦(元北海道大学 低温科学研究所)・北方林と私の40年：北海道とカムチャツカ

15:00～15:40 西村尚之(群馬大学 情報学部)・日本における様々な針葉樹林の長期動態観測

15:40～16:20 今博計(北海道立総合研究機構 林業試験場)・気象変動を利用した樹木の結実戦略

参加者 31名

(3) 役員選挙

会長の選挙および地区役員(任期2024年4月～2026年3月)の選挙をオンラインで実施した。

有権者：投票2か月前にあたる8月1日時点で、下記の二つの条件を全て満たす方

1. 北海道地区を「連絡先住所」(＝郵送物発送先住所)としている正会員の方
2. 会費を1年分以上完納した方

投票期間：2023年10月1日0:00～10月31日23:59

11月1日に選挙管理委員および庶務幹事がオンライン開票の結果を確認。

開票結果：投票総数 34 票。次期会長は、仲岡雅裕氏(北海道大学・北方生物圏フィールド科学センター)が 29 票で選出。次点は相場慎一郎氏(北海道大学・地球環境科学研究院)の 3 票。役員選挙では、石塚航氏(北海道立総合研究機構)、早矢仕有子氏(北海学園大学・工学部)、菊地賢氏(森林総合研究所・北海道支所)、安東義乃氏(合同会社エゾリンク、北海道大学・地球環境科学研究院)、日野貴文氏(北海道立総合研究機構)が信任された。次期会長からの依嘱により、次期庶務幹事に小泉逸郎氏(北海道大学・地球環境科学研究院)、次期会計幹事に先崎理之氏(北海道大学・地球環境科学研究院)が選出された。

(4) 役員会

2023年4月～8月(メール審議)

役員交代について審議した。

2023年7月～8月(メール審議)

講演会の開催時期・内容について審議した。

2023年10月(メール審議)

「宗谷丘陵南風力発電事業 計画段階環境配慮書に対する意

見書」について審議し、10月27日に事業者宛に発送し、地区会HPに掲載した。

2023年10月(メール審議)

大会・総会の開催時期・形式について審議した。

2023年11月(メール審議)

地区会選出の次期(2024年4月から2026年3月)自然保護委員として、露崎史朗氏(北海道大学・地球環境科学研究院)と早矢仕有子氏(北海学園大学・工学部)を選出した。

2023年10月(メール審議)

「宗谷丘陵南風力発電事業 計画段階環境配慮書に対する意見書」について審議し、10月27日に事業者宛に発送し、地区会HPに掲載した。

2024年2月(メール審議)

「(仮称)HOKA7 太陽光発電事業計画段階環境配慮書に対する意見書」について審議し、2月15日に事業者宛に発送し、地区会HPに掲載した。

2024年3月(メール審議)

北海道の「地域脱炭素化促進事業の促進区域の設定に関する環境配慮基準」(素案)について審議し、3月22日に北海道に対してパブリックコメントを提出した。

東北地区会

(1) 東北地区会第69回大会を開催

日程 2024年11月9日(土)～10日(日)

会場 弘前大学 <https://www.hirosaki-u.ac.jp/info/access/> (青森県弘前市文京町一番地)

大会ウェブサイト <https://sites.google.com/view/esj-tohoku69>

公開シンポジウム「共に発見する、市民と科学の交差点」

辻本翔平(名城大・農学部)日本の四季の変化を未来になぐー市民とともに歩む生物季節モニタリングの始動ー

小林誠(十日町市立里山科学館越後松之山「森の学校」キョロロ)里山の生物多様性をみんなで探究するー自然科学館が育む市民科学ー

工藤忠(日本鱗翅学会東北地区自然保護委員長)白神山地の蛾類調査ーライトトラップで得にくい種への工夫ー

一般講演(口頭発表)

田村慧悟(山形大院・理工)「ヒユ科食カメノコハムシ類3種が示す不完全な生息場所隔離ー網室を用いた定量化」

秋山翔午(弘前大・農生・生物)「オオクチバスを中心とした湖沼の魚類相の形成に関わる要因の解明」

鈴木碩通(東北大院・生命)「群集構造と環境の広域パターンから見た日本における動物プランクトン多様性決定機構」

山口拓海(東北大・理学部・マクロ生態)「ニホンウナギ

の潜在的な分布予測モデル」

兼子創（東北大・理学部・マクロ生態）「種分布モデルを用いたコクチバスの定着リスク評価」

松本健伸（東北大・理学部・マクロ生態）「種分布モデル（SDMs）によるニホンカモシカの生息域予測と気候変動の影響評価」

畑中悠和（東北大・農）「ナラ枯れが枯死木の分解に与える長期的影響」

李欣彤（東北大・農・植物）「Impact of Oak Wilt-Induced Secondary Metabolites on Wood Decay and Fungal Community」

三嶋大翔（弘前大・農生・生物）「クモの網は植食者を介して植物にどのような間接効果を与えるか」

横川寛太（弘前大・農生）「絶食刺激と生息密度がイチゴハムシの摂食嗜好性にもたらす影響」

関海斗（弘前大院・農生・生物）「サヨリに特異的に寄生するウオノエ科等脚類サヨリヤドリムシの宿主選好性」

佐々木あゆ（岩手医大・医）「岩手県高松の池から採集されたタイホクケンミジンコ（カイアシ綱、キクロプス科）の形態およびDNA解析による検討」

小室宗士（福島大院・理工・共生システム理工）「津波跡地で復活・残存したミズアオイ集団の遺伝的多様性評価」

木村仙（弘前大・農生・生物）「スペシャリスト植食性昆虫ヨモギハムシ（*Chrysolina aurichalcea*）の飛翔筋多型性と飛翔能力消失の要因」

矢野誠也（弘前大・農学・生物）「ナミテントウにおける斑紋多型の維持と多型頻度の緯度パターンをもたらす要因は？」

工藤甲斐（弘大院・農生・生物）「ブナ稚樹における標高傾度に沿った開芽時期の遺伝的分化」

濱野公輔（東北大・農）「木材腐朽菌チャカワタケ菌糸におけるシグナル伝達およびCa²⁺可視化の試み」

石田清（弘大・農生・生物）「山地のブナ集団は晩霜害リスクの時間的空間的変動に対してどのように適応しているか」

橋本洸哉（弘前大・農生）「生物間相互作用の変動性が人為攪乱下の個体群の安定性に与える多面的な影響」

森井悠太（弘前大・農生・生物）「長期データと状態空間モデルを用いた希少鳥類の交通事故発生パターンの推定」

(2) 地区委員会報告

2024年度定例地区委員会は、2024年11月9日に弘前大学で開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は次の11名であった。松政正俊（地区委員長）、石田清、山岸洋貴、星崎和彦、鈴木まほろ、藤山直之、兼子伸吾、福島慶太郎、野口麻穂子（会計幹事）、菅孔太郎（庶務幹事）、黒沢高秀（同）

<報告事項>

・庶務報告
黒沢庶務幹事より、2024年度11月までの活動状況と会員動向について報告があった。

- 1) 2024年1月7日：日本生態学会東北地区会報84号を発行・メール告知（地区会事務局）
- 2) 2024年6月4日：地区会委員選挙（web投票、再投票依頼、投票期間6月30日まで）開始メール告知（選挙管理委員会）
- 3) 2024年7月23日：地区会委員選挙および地区委員長選出結果メール告知（選挙管理委員会）※2024年9月：地区会事務局引き継ぎ
- 4) 2024年9月24日：第69回地区大会の案内をメール配信（東北地区会大会準備委員会）
- 5) 2024年11月7日：第69回地区大会の案内（要旨集ほか）をメール配信（東北地区会準備委員会）
- 6) 2024年11月9～10日：第69回地区大会（青森県担当）定例地区委員会、公開シンポジウム、一般講演、地区大会総会

・会計報告

野口会計幹事より、2023年度決算と会計監査について報告があった（資料1）。

・自然保護専門委員の推薦

2024年4月1日からの自然保護専門委員（東北地区委員）について、昨年の地区委員会・総会後に黒沢高秀氏（福島大、再任）と高橋雅雄氏（岩手県立博物館、新任）が選定され推薦されたことが報告された。

・岩手生態学ネットワーク活動および会計報告

鈴木委員より、2024年2月23日に市民講座を実施したこと、2025年にも市民講座を予定していること、それらに関する会場使用料やちらし作成等の支出（見込みを含む）について中間報告があった。

<審議事項>

・次回、次々回地区大会開催地

昨年度地区委員会・総会で承諾されたとおり、次回大会（2025年）を岩手県で開催することが確認された。さらに、次々回大会（2026年）は、「東北地区会運営の手引き」の「別表1 東北地区開催地一覧」に従い、事前に秋田県へ依頼し内諾を得たことが報告され、承諾された（地区大会総会で追認）。全国大会を宮城県で行った際に、その分地区会の開催を1回スキップすることについて、昨今の情勢に鑑みて再検討できないかという意見があり、宮城県の地区委員に様子を聞いてみることとなった。

・2024年度予算執行状況および2025年度予算案

野口会計幹事より、2024年度予算執行状況について説明

がなされ、承認された。

次いで、2025年度予算案について説明がなされ、「岩手生態学ネットワーク支援費」50,000円を引き続き計上するなどの案が示された。次年度繰越金が多いことから、地区大会・講演会の小計を250,000円から引き上げて総会に提案することになった。鈴木委員より、2025年度に予定されている岩手生態学ネットワークの市民講座などに関して説明がなされた。これらも含めて、承認された（予算執行状況および予算案のいずれも、地区大会総会にて追認）。

<その他>

・次年度地区大会について

岩手県委員より次年度の地区大会について説明された。

・総会議長について

立候補や推薦がでなかった場合、地区委員会として青森県の参加者から推薦することとなった。

・国内希少野生動植物種生息地について

黒沢自然保護専門委員会委員より、福島県で確認された国内希少野生動植物種生息地について報告がなされた。

(3) 地区大会総会報告

2024年度東北地区会総会は、2024年11月10日に弘前大学で開催された。議長に山岸洋貴氏（弘前大）を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。

・庶務報告および会計報告が了承された。

・岩手生態学ネットワークの活動および会計について報告がなされた。

・地区大会開催地について、今回は岩手県で開催することが確認され、次次回大会を秋田県で行うことが審議・承認された。

・2024年度予算執行状況が原案どおり承認された。2025年度予算案は計算間違いがあるため、これを修正する条件で承認された。

(4) 発表賞の表彰

本地区大会一般講演について、参加一般会員の審査により地区大会発表賞最優秀賞1名、優秀賞2名を選出し、表彰した。

最優秀賞 三嶋大翔（弘前大・農生・生物）

優秀賞 秋山翔午（弘前大・農生・生物）、横川寛太（弘前大・農生・生物）

関東地区会

2024年（1月～12月）活動報告

(1) 地区委員会・地区総会報告

2024年3月4日に地区委員会および地区総会報告を、オンライン（zoom）で実施した。2023年度の活動報告および決算報告がなされ、2024年度予算案が審議され、承認された。

(2) 2024年2月18日に第44回関東地区会生態学関係修士論文発表会をハイブリッド（対面：東京大学柏キャンパス、オンライン zoom）で開催した。また、併せて国立科学博物館の永濱藍博士による特別講演「東・東南アジアにおける開花フェノロジーの多様性」が行われた。修士論文発表は以下の通りであった。

【口頭発表演題】

林部真奈（東京都立大学）「種子中の化学防御物質に依存するアカネズミとヒメネズミの餌選択」

秋元洋希（早稲田大学）「ヘビの「呪い」：匂いを介した新規間接防御システムの解明」

松本凌（東京海洋大学）「海洋酸性化が多板綱群集に与える影響とそれを介した間接効果」

青田幸大（東京農業大学）「鯨類の睡眠タイプは体サイズと環境温度に依存する」

戸田達也（東京大学）「ダンゴイカ類の繁殖生態-繁殖形質の季節変化と交配行動-」

高井万葉（東京大学大学院）「Drivers of river migration and growth in Japanese seabass（スズキに河川回遊をもたらす駆動力と成長に関する研究）」

竹中浩貴（東京大学大学院）「耳石 Sr 安定同位体比を用いた筑後川におけるエツの母川判別

飛詰峻（筑波大学）「茨城県つくば市の茅場におけるススキの空間分布とその制御要因-茅資材として利用されるススキの現存量と質に着目して-」

宮岡伶安（横浜国立大学）「侵食前線が規定する植生構造と進化的背景-房総丘陵63木本種の系統シグナル解析より」

中村奈輔（新潟大学）「オオバコモザイクウイルス（PIAMV）野草分離株の宿主適応に関する研究」

仲美凧（横浜国立大学、東京大学）「高緯度北極圏極オアシス3万年の一次遷移過程における土壌真菌群集の動態解明」

Duangmany Phongsa, (Yokohama National University) 「The Role of Chytrids on Decomposition of Large Algae (*Staurastrum dorsidentiferum* and *Micrasterias hardsyi*) in Lake Biwa」

田原将初（横浜国立大学）「相模湾における植物プランクトン及び菌類の関係解明」

【ポスター発表演題】

CHEN ZIYAN（横浜国立大学）「里山林床における異なる下草刈りレジームが駆動する生物多様性と分解の関連性」

藤本大翔（茨城大学大学院）「コアシナガバチにおける早期羽化雄のコロニー上での行動」

宮崎明星（茨城大学大学院）「同所的に生息するフタオビドロバチ属2種の営巣生態の比較」

青田雄太郎（東京大学）「自然体験の「量」vs「質」-生物多様性保全行動への影響」

安楽健太（東京大学）「水文変動がアマゴ（*Oncorhynchus masou ishikawae*）の産卵時の掘り行動に与える影響」

芹澤岳士（東海大学）「ヒメイカにおける個性が与える適応度への影響」

福田智也（茨城大学大学院）「外来蝶（アカボシゴマダラ）と在来蝶2種の個体数変動と樹高選好性の比較」

秋山礼（東大院）「日本列島におけるユビナガコウモリの集団遺伝構造の解明及び移動特性の推定」

朝鍋遥（東大院）「汽水域にも進出したナミアメンボ（カメムシ目・アメンボ科）の系統地理」

須田峻（東京大学）「集団ゲノミクスから探るハクサンハタザオの日本列島における気候適応の進化史」

市村 瑠美（東京農業大学）「コウガイビル属 *Bipalium* の採餌生態-在来種と外来種が混在する捕食・被食関係-」

太田千晴（東京大学）「土壌環境中におけるミヤコグサ共生根粒菌の分布とその機能」

砂川勇太（東京大学）「微小なランの送粉研究」

真壁 凜花（茨城大学大学院）種構成が異なる植物群落における寄生植物ネナシカズラの宿主選択性」

高野菜桜子（茨城大学大学院）「大葉シダ植物の老化する葉からの窒素回収」

高階眞丈（横浜国立大学）「青森県八甲田山における彩雪現象:緑雪や赤雪の色の違いは何の違い?」

(3) 2024年8月7日にハイブリッド（対面：東京大学弥生講堂セイホクギャラリー、オンライン（zoom））にて、下記の日本生態学会関東地区会公開シンポジウムを開催した。

タイトル：生態学×動物行動学の新たな展開：人為活動が動物の行動変化を介して生態系機能・サービスにもたらす影響

企画者：内田健太（東京大学）・曾我昌史（東京大学）

概要：生態系の機能やサービスを測ることは、生態系の保全や管理を行ううえで欠かせない。これまで生態学では、生息地や生物の数や分布の視点から生態系機能・サービスに関する研究が数多くなされてきたが、重要な要素が見過ごされてきた。それは、人為活動に対する動物の「行動変化」である。実際に最近の研究から、人間活動の変化（都市化や人口減少等）は様々な形で動物の行動を変化させ、潜在的に生態系のプロセスやそこから生み出されるサービス・ディスプレイに広範な影響を及ぼし得ることが分かってきた。例えば、送粉や種子散布、獣害問題は、特定の種や個体の行動に強く依存するため、こうした行動変化による影響を大きく受けやすいだろう。にもかかわらず、このトピックに関する体系的な議論や実証研究は、これまで

全くと言っていいほど行われてこなかった。本シンポジウムでは、国内外から多様なバックグラウンドを持つ第一線で活躍する研究者を招き、人為的な動物の行動変化が生態系サービスに及ぼす影響を議論した。

【プログラム】

- ・ Daniel Blumstein（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）
『Translational Behavioral Biology: Linking Antipredator Fear to Ecosystem Services in the Anthropocene』
- ・ 富田幹次（高知大）
Kanji Tomita (Kochi University)
『Ecosystem consequences of animal behavior change: A case of brown bear digging for cicada nymphs』
- ・ 先崎理之（北海道大学）
Masayuki Senzaki (Hokkaido University)
『Animal behavior in degraded sensory environments: implications for management of ecosystem services』
- ・ 稲垣亜希乃（東京農工大学）
Akino Inagaki (Tokyo University of Agriculture and Technology)
『Human impact on vertebrate scavenging: What can the behavioral change of keystone scavengers bring?』
- ・ 片平浩孝（麻布大学）
Hiroataka Katahira (Azabu University)
『Tangled misery: unexpected zoonotic diseases attributed to human activities』
- ・ 青田雄太郎（東京大学）
Yutaro Aota (The University of Tokyo)
Exploring the impact of animal behavior changes on human-nature interactions』
- ・ 久保雄広（国立環研究所）
Takahiro Kubo (National Institute for Environmental Studies)
『Wildlife viewing: How can we maximize the economic benefits and minimize ecological impacts?』
- ・ 内田健太（東京大学）
Kenta Uchida (The University of Tokyo)
『Impact of wildlife's increased tolerance to humans on ecosystem services and disservices』
- ・ コメンテーター：曾我昌史（東京大学）
Commentator: Masashi Soga (The University of Tokyo)
- ・ 総合討論
General Discussion

中部地区会

令和6年度中部地区大会および総会の開催

開催日時：2024年12月21日（土）12:00~18:00

場所：三重大学環境情報科学館

(1) 総会 (12:00~12:30)

三重大学環境情報科学館3階 PBL 演習室において中部地区会総会を対面とオンラインのハイブリッドで開催した。出席者は12名。

【報告事項】

・中部地区会2024年度研究助成実績

2024年度は11件の応募があり、事務局と中部地区代議員の5名でメール審議を行い、以下の3件を採択したことが報告された(所属、身分は2024年5月7日現在の情報)。

諏訪竜之介(信州大・院・M1)「植物根と菌根菌の共生から探る山岳高山域の窒素栄養獲得戦略」

鈴木華実(名古屋大・院・博士研究員)「ササ種子に対する節足動物の採餌作用の検証：120年周期の更新に種子食者が及ぼす影響の総合的理解に向けて」

富高まほろ(筑波大・院・D3)「歴史の古い草原に咲く花は、多様な人々の選好性を満たすか？」

・会計報告

事務局会計担当より、2023年度の会計報告および2024年度の会計収支見込報告が行われた。

・中部地区代議員および自然保護専門委員会委員について
安藤正規氏(岐阜大学)が2024年1月に中部地区代議員に就任されたこと、和田直也氏(富山大学)と増田理子氏(名古屋工業大学)が2024年4月に自然保護専門委員会中部地区担当委員に再任されたことが報告された。

・(仮称)新潟関川風力発電事業計画に対する要望書の提出について

希少猛禽類の生息が確認されている新潟県岩船郡関川村および山形県西置賜郡小国町の行政界周辺における風力発電所の建設計画に対し、中部地区会として2024年7月19日付で事業者、関連省庁の大臣、地方自治体の首長に対して事業計画の取りやめも含めた抜本的な見直しを求める要望書を提出したことが報告された。

【審議事項】

・中部地区会会長の選出について

次期(2025年1月~2026年12月)の中部地区会会長として、梶村恒氏(名古屋大学)が推薦され、全会一致で承認された。事務局は名古屋大学に置くこととする。

・次年度の会計について

次年度も学生会員または学位取得後3年以内の若手会員に対する研究助成を継続することが承認された。また、今後、懇親会を開催する場合、学生への負担軽減の措置として地区会から懇親会経費の一部を補助することが承認された。

・次回の地区大会について

次回の地区大会の開催地については継続審議とする。

(2) 研究発表会 (13:15~17:00)

三重大学環境情報科学館3階 PBL 演習室において発表者39名による1分間ずつの自己紹介と研究発表紹介のフラッシュトークを行った後、同館1階ホールにおいてポスター発表を行った。参加者75名、うち発表者39名。

○印は発表者、★印は研究発表賞受賞演題。

★「Bioaerosols and Novel Drone Sampling Methods」○Rohit Bangay (Graduate School of Natural Science and Technology, Kanazawa University), 都野展子(金沢大学自然科学研究科)

「糞虫はヤマモモ種子の二次散布に貢献するか？」○渡邊彩音(名古屋大学大学院生命農学研究科)、岸本圭子(龍谷大学先端理工学部)、中川弥智子(名古屋大学大学院生命農学研究科)

「屋久島のニホンザルのキノコ食について~サルはキノコの何を判断して食べるのか~」○大沼明日佳(金沢大学自然科学研究科)、都野展子、西脇ゆり(金沢大融合研究域)、澤田晶子(京都大学野生動物研究センター)

★「ニホンカナヘビ *Takydromus tachydromoides* の遺伝的集団構造の解明」○上地俊輔、玉山雅浩(三重大学大学院生物資源学研究科)、長崎哲新(株式会社 KANSO テクノス)、太田英利(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)、河村功一(三重大学大学院生物資源学研究科)

「ホオジロの色彩形態と囀りの特徴が繁殖成功に与える影響について」○松浦志穂(金沢大学大学院自然科学研究科)、大河原恭祐(金沢大学理工研究域)

★「訪花性昆虫の生得的な花の認識を支える神経機構」○桂宗広、藤井航平(名古屋大学理学研究科)、蟻川謙太郎、松下敦子、木下充代(総研大統合進化科学研究センター)、石川由希(名古屋大学理学研究科)

「花卉の角度および花卉の傾斜により生じる影がチョウの訪花行動におよぼす影響」○渡辺旭裕(岐阜大学大学院連合農学研究科)、土田浩治、岡本朋子(岐阜大学)

「伊豆諸島集団におけるツリガネニンジンの訪花昆虫相~本州集団との比較と花上捕食者の影響~」○熱方悠人(新潟大学大学院自然科学研究科)、阿部晴恵(新潟大学佐渡自然共生科学センター)

「防鹿柵内で被圧するササを8年間刈りしたトウヒ稚樹の8年後の生残と成長」○森壮汰(三重大学生物資源学部)、印南秀彦、鳥丸猛、木佐貫博光(三重大学大学院生物資源学研究科)

「フェモラータオオモモブトハムシの変態と随伴する *Acrostichus* 属線虫の生活環の解明」○鹿内拓斗(三重大学生物資源学部)、松田陽介、北上雄大(三重大学大学院生物資源学

研究科)

「アラゲキクラゲから分離された真菌食性線虫の異なる菌種ごとの増殖特性」○西村穂香(三重大学生物資源学部)、井上伸(三重県林業研究所)、松田陽介、北上雄大(三重大学大学院生物資源学研究科)

「安定同位体比から見た中央アジア・キジルクム砂漠の塩性低地に分布する木本植物のガス交換特性」○矢野功祐(三重大学大学院生物資源学研究科)、玉村匠大(三重大学生物資源学部)、宮沢良行(九州大学キャンパス計画室)、Kristina TODERICH、松尾奈緒子(三重大学大学院生物資源学研究科)

「Mapping of suitable areas for the planting of sago palms in Indonesia」○Mahavira Aqila Putri, Akemi Itaya (Graduate School of Bioresources, Mie University)

「ブナ当年生実生の間断給水をともなう土壌乾燥ストレスに対する生理的・形態的反応」○中村峻弥、鳥丸猛(三重大院生資)、赤路康朗(国環研)、赤田辰治(弘前大農生)、木佐貫博光(三重大院生資)

「Flora and vegetation types of Vozrozhdeniya Island on the dried bottom of the Aral Sea」○Azamat Sultamuratov (Institute of Botany of the Academy of Sciences of the Republic of Uzbekistan), Matsuo Naoko (Graduate School of Bioresources, Mie University), Bekhzod Adilov (Institute of Botany of the Academy of Sciences of the Republic of Uzbekistan), Kristina Toderich (Graduate School of Bioresources, Mie University)

★「全ゲノム解析を用いた日本におけるスッポン属の遺伝的集団構造の解明」○桑原紗香、河村功一(三重大学大学院生物資源学研究科)、石崎大介(滋賀県水産試験場)、山本義彦(大阪府立環境農林水産総合研究所)、疋田努(京都大学)、太田英利(兵庫県立大学)、鈴木大(東海大学)、吉川夏彦(国立科学博物館)、鈴木規慈(環境省福岡事務所)

「中央アジア・キジルクム砂漠の塩性低地における景観の分類」○加藤弘太郎(三重大学生物資源学部)、宮沢良行(九州大学キャンパス計画室)、Kristina TODERICH、松尾奈緒子(三重大学大学院生物資源学研究科)

「スギ人工林に生育するヒナノシヤクジョウの発生分布と環境要因」○大西由花(三重大学生物資源学部)、北上雄大、松田陽介(三重大学大学院生物資源学研究科)

「樹幹における蘚類サイズが線虫の群集構造に及ぼす影響」○松村龍一、北上雄大、松田陽介(三重大学大学院生物資源学研究科)

「中央アジア・キジルクム砂漠に自生する木本植物の枝内水の

酸素・水素安定同位体比の比較」○玉村匠大(三重大学生物資源学部)、宮沢良行(九州大学キャンパス計画室)、Kristina TODERICH、松尾奈緒子(三重大学大学院生物資源学研究科)

「都市環境におけるイソヒヨドリの生息と環境構造」○堀嘗将(金沢大学大学院自然科学研究科)、大河原恭祐(金沢大学理工研究域)

「アズマモグラのトンネルを利用する動物相の把握：カメラトラップとピットフォールトラップの活用」○山澤泰(富山大学大学院理工学研究科)、横畑泰志(富山大学学術研究部理学系)

「アジアクロセイヨウショウロの砂質土壌における根外菌糸の伸長特性」○辻汰希(三重大学生物資源学部)、北上雄大、松田陽介(三重大学大学院生物資源学研究科)

「GPS 首輪に内蔵された振動センサーを用いたニホンジカの行動推定方法の検討」○久山高平、吉原佑(三重大学大学院生物資源学研究科)

「耳石ストロンチウム同位体比 ($^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$) 分析を用いた、木曾三川におけるアユ (*Plecoglossus altivelis* D. Don) の生活史多様性の比較」○白石悠貴(富山大学理学部生物圏環境科学科)、永山滋也(岐阜大学高等研究院)、太田民久(富山大学学術研究部理学系)

「雪渓上に移入する節足動物の季節動態とライチョウの繁殖時期との関係」○峯村友都(富山大学大学院理工学教育部)、和田直也(富山大学研究推進機構 GRASS)

「白山山麓の豪雪地帯におけるブナ-ミズナラ原生林の動態」○高城和佳(岐阜大学応用生物科学部)、廣田充(筑波大学生命環境系)、谷岡庸介(筑波大学生命環境系)、大塚俊之(岐阜大学高等研究院)

「石垣島のガブルマタ川マングローブ林における森林構造」○木下真里亜(岐阜大学応用生物科学部)、Nada Yimatsa(岐阜大学大学院連合農学研究科)、篠塚賢一、大塚俊之(岐阜大学高等研究院)

「絶滅危惧種の菌根菌トガサワラショウロを検出するための特異的プライマーの開発」○清水裕文(三重大学生物資源学部)、岡田経太(山口大学大学院創成科学研究科)、北上雄大(三重大学大学院生物資源学研究科)、村田政穂(秋田県林業研究研修センター)、奈良一秀(東京大学大学院新領域創成科学研究科)、松田陽介(三重大学大学院生物資源学研究科)

「アカハライモリの季節移動」○彦根拓未(岐阜大学大学院自然科学技術研究科)

「荒ぶる日本海の砂浜でイカリモン幼虫はどのように生きてい

るのか」○山本日里、上田哲行、百瀬年彦(石川県立大学生物資源環境学部)

「西駒ヶ岳の高山地域のコケモトとハイマツ群落における線虫の群集構造」○竹田奏斗、松田陽介、北上雄大(三重大学大学院生物資源学研究科)

「諏訪湖におけるメガネサナエの個体数動向」宮坂真司(諏訪湖環境研究センター)、福本匡志(上伊那農業農村支援センター)、谷野宏樹、筒井裕文、○北野聡(諏訪湖環境研究センター)

「スギの樹齡がアーバスキュラー菌根菌の菌根形成率に及ぼす影響」○片山悠史(三重大学生物資源学部)、Djotan Kevin、北上雄大、松田陽介(三重大学大学院生物資源学研究科)

「児童によるセミ類の初鳴日観測とその課題—富山市における市民参加型の生物季節観測を目指して—」○丸山智輝(富山大学理学部)、和田直也(富山大学研究推進機構 GRASS)

★「森林限界域における細根系を介した窒素およびリン吸収と滲出物；外生菌根種とエリコイド菌根種の比較」○諏訪竜之介(信州大学院総合理工学研究科)、平野侑(信州大学理学部)、北上雄大(三重大学大学院生物資源学研究科)、牧田直樹(信州大学理学部)

「樹木穿孔性昆虫の繁殖に及ぼす揮発性物質の影響：高濃度エタノールを注入したスギ・ヒノキ伐倒丸太に誘引される昆虫は何か、その穿孔様式はどのように変化するのか？」○中山直紀(名古屋大学大学院生命農学研究科)、梶村恒(名古屋大学大学院生命農学研究科)

「カマツカとナガレカマツカの微生物息場所利用」○安田航輔(岐阜大学大学院自然科学研究科)、伊藤健吾(岐阜大学大学院自然科学技術研究科)

「森林限界域における樹木の細根ホスファターゼ活性と土壌リン・窒素濃度の関係性」○平野侑、諏訪竜之介(信州大学理学部)、北上雄大(三重大学大学院生物資源学研究科)、牧田直樹(信州大学理学部)

(3) 研究発表賞の発表(17:30~17:50) および懇親会(17:00-18:00)

厳正な審査の結果、以下の5名の学生が研究発表賞に選ばれた。三重大学環境情報科学館1階ホールにおいて懇親会および研究発表賞授与式を行った。

Rohit Bangay (Graduate School of Natural Science and Technology, Kanazawa University)

上地俊輔(三重大学大学院生物資源学研究科)

桂宗広(名古屋大学理学研究科)

桑原紗香(三重大学大学院生物資源学研究科)

諏訪竜之介(信州大学院総合理工学研究科)

近畿地区会

(1) 2024年近畿地区会委員会および総会

日時：2024年12月21日(土)

会場：Zoomによるオンライン開催

【委員会】

【議題】

- 2023年度会計について、実績報告がなされ承認された。
- 2024年度会計について、現時点での実績報告がなされ承認された。
- 2025年度事業計画と予算案について説明がなされ承認された。

【報告】

- 2024年度近畿地区会公募集会の決定と開催報告がなされた。
- 2024年度近畿地区会例会の開催報告がなされた。

【総会】

2024年近畿地区会委員会での審議・報告事項について、議長から報告が行われ承認された。

(2) 2024年 近畿地区会例会

日時：2024年7月27日(土)

会場：対面開催(大阪公立大学理学部・杉本キャンパス)

以下の11件の口頭発表が実施された。質疑応答では、活発な議論がなされた。

口頭発表：

- 大河龍之介(京大・ア)、北島薫(京大・農)、佐藤宏樹(京大・ア)「熱帯林生態系の種子散布における貯食型散布の重要性評価」
- 近藤湧生(大阪公大・理)、岡本鼓都里(大阪公大・理)、北向祐人(大阪公大・理)、古屋康則(岐大・教育)、安房田智司(大阪公大・理)「野生のミナミメダカは夜間に繁殖行動を開始していた」
- 松浦匠(大公大・農)、山本哲也(長大)、松本嘉幸(千葉)、市野隆雄(信大・理)、平井規央(大公大・農)、上田昇平(大公大・農)「*Stomaphis* 属アブラムシの分子系統解析—属内の系統関係と寄主植物利用の進化」
- 島玄太(京大・生命)、東樹宏和(京大・生命)、鈴木健大(理研・BRC)「時系列因果推論による微生物群集動態の駆動要因の特定」
- 高谷智響(京大・農)、遠藤千晴(京大・農)、井鷲裕司(京大・農)「小笠原諸島固有絶滅危惧種アサヒエビネの保全遺伝解析」
- 安田彩人(近大院・農)、土井具次(近大院・農)、石若直

人(近大院・農)、平岩将良(近大・農)、早坂大亮(近大・農)「内分泌かく乱物質ノニルフェノールが雌雄同株植物キュウリの花の性比と生長に及ぼす影響」

7. 湯本原樹(京大、生態研)、本庄三恵(京大、生態研)、工藤洋(京大、生態研)「ハクサンハタザオにおける生育・繁殖ステージに応じた凍結耐性の標高分化」

8. 梅田悠起(近大院・農)、田中健太(筑波大・山岳セ)、幸田良介(大阪府環 農水研・多様性)、平岩 将良(近大・農)、竹内遼(近大・農)、早坂大亮(近大・農)「イノシシによる土壌攪乱の多様性が草原植生におよぼす影響:掘り起こしを模倣した野外操作実験での検証」

9. 平岩将良、石若直人、秋山大樹、太田貴生斗、早坂大亮(近大・農)「生物群集モニタリングに機械学習は有用か?:生態系機能評価のための最適手法の探索」

10. 村田紗也(京大・農)、時任美乃理(京大・農)、小野田雄介(京大・農)、金子隆之(京大・農)、山崎理正(京大・農)、高柳敦(京大・農)、石原正恵(京大・フィールド研)、檀浦正子(京大・農)「空間解析によるヤドリギの分布特性とその規定要因の探索」

11. 日高諒、細田千咲、安房田智司(大工大・理)「社会構造が複雑な野外では罰はどのような状況で起こるのか? 協同繁殖魚サボリを用いた野外操作実験」

(3) 2024年 公募集会の決定と開催

生態学の進歩と普及を図るために、近畿地区会員が主催する生態学会員および一般市民を対象とした生態学関連の集会をサポートするため、公募集会について2024年4月19日～5月24日まで募集を行った。応募は2件あり、地区会審査員で協議した結果、2件を採択とし、応募金額を配当した。採択状況は以下の通りである。

1. 自然共生サイト滋賀県山門湿原の保全活動と課題
(担当:前迫ゆり/関西自然保護機構)

実施日:2024年9月16日

場所:西浅井運動広場体育館 多目的ホール(滋賀県長浜市西浅井町大浦2590)

2. 第15回 琵琶湖地域の水田生物研究会
(担当:大塚泰介・金尾滋史/滋賀県立琵琶湖博物館)

実施日:2024年12月15日

場所:滋賀県立琵琶湖博物館(滋賀県草津市下物町1091)

中国四国地区会

(1) 第67回中国四国地区大会(2024年5月11、12日 於:岡山大学)

【ポスター発表】(5月11日)

「流下による空間的選別:多雨な棚田細流のタカハヤでの検証」○山田寛之(愛媛大・理)【最優秀賞】

「稀少淡水二枚貝マツカサガイの飼育環境の検討」○中村柑南(愛媛大・理)、渡壁咲希(愛媛大附属高)、高尾実里(愛媛大附属高)、川崎優人(愛媛大附属高)、松本浩司(愛媛大附属高)、畑啓生(愛媛大学・院・理工)

「小型から大型の昆虫まで採食する?硬いものは食べられない?~給餌試験によるニホンヤマネ *Glirulus japonicus* の食性や嗜好性について~」○磯村晃良(山口大・院・創成科学)、渡邊華奈(山口大・院・創成科学)、細井栄嗣(山口大・院・創成科学)【優秀賞】

「四国における猛禽類の秋の渡りと地形・気象条件との関係」○兒玉博之(徳島大・院・理工)、河口洋一(徳島大・准教授・理工)、佐藤雄大(徳島大・学術研究員・理工)

「中国の乾燥地に生育する *Salix psammophila* の異なる個体群における生理生態的形質」○盧星霖(岡山大・院・環境生命自然)、秦龍(中国・河南科技大)、劉岩(岡山大・院・環境生命自然)、張国盛(中国・内蒙古農業大・林学院)、三木直子(岡山大・院・環境生命自然)

「絶滅危惧キク科植物ミコシギク *Leucanthemella linearis* の発芽特性」○稲葉啓斗(広島大・総合科学)、大崎杜巳(早稲田大・学振PD)、山本晃弘(広島市植物公園)、塩路恒生(広島大学東広島植物園)、中坪孝之(広島大・院・統合生命)【優秀賞】

「ヤマカガシにおける頭部相対成長」○和田倭太郎、木寺法子(岡山理大・生地)

「A preliminary study on re-evaluating the allelopathic effects of Chinese tallow (*Triadica sebifera*)」○盛澤鵬(広島大学・院・統合生命)、嶋村正樹(広島大学・院・統合生命)、根平達夫(広島大学・瀬戸内CNセ、広島大学・院・統合生命)、和崎淳(広島大学・瀬戸内CNセ、広島大学・院・統合生命)、坪田博美(広島大学・瀬戸内CNセ・宮島、広島大学・院・統合生命)

「捕食回避戦略の異なるアゲハチョウ類幼虫における微生物環境選択の違い」○仁平岳登(高知大)、鈴木紀之(高知大)

「ニホンヤモリの空中反転反応に尾の自切が及ぼす影響」○神谷凜(岡理大・院・理工学)、木寺法子(岡理大・生地)

「収集容器はカラスによるゴミの食い荒らしに対して効果的か?」○山田菜月(高知大・院・総合人間)、山浦悠一(森林総研)、比嘉基樹(高知大・理工)

「都市生態系における在来一年草ツユクサの送粉者相と繁殖成功の関係」○山口寛登、藤原日向、中田和義、勝原光希(岡山大・院・環境生命自然科学)【優秀賞】

「岡山市藤田地区の農業用パイプラインに定着した外来種タイワンシジミの環境DNA検出」○東哲平、濱田麻友子、勝原光希(岡山大・院・環境生命自然科学)、西村圭太、川上潤(岡山県耕地課)、中田和義(岡山大・院・環境生命自然科学)

「時系列 Landsat-TM データを用いた林野火災跡地の植生回復に関する予備的研究」○小山克輝(広島大・院・統合生命)、

坪田博美(広島大・瀬戸内CNセ・宮島、広島大・院・統合生命)

「愛媛県特定稀少野生動植物種ヤリタナゴ、マツカサガイ、イシガイの保護管理計画」○畑啓生、井上幹生(愛媛大学理学部生物)、三宅洋(愛媛大学工学部土木)松本浩司(愛媛大学附属高校)、成松克史(愛媛県生物多様性センター)、山本貴仁(西条自然学校)

「ベトナム中部の海岸砂丘における残存自然林とアカシア植林地の下層植生構造」○Doan Quoc Tuan(岡山大・院・環境生命自然)、松本哲也(茨城大・院・理工学)、Dinh Tien Tai(フェエ大学 IREN)、三木直子(岡山大・院・環境生命自然)、Le Thai Hung(フェエ農林大学)、Ho Dac Thai Hoang (HUSTA)、廣部宗(岡山大・院・環境生命自然)

「香川大学林町キャンパス内の草地におけるノニガナの生育実態」○重原奈津子(きょうと生物多様性センター)、小宅由似(香川大・創工)

「自然共生サイト」コンケンピオガーデン・コンケンセラピーガーデンの生物相」○築地孝典(藤クリーン株式会社)

「半陸生ウミヘビの海岸洞窟利用に及ぼす潮汐の影響」○牧陸人、木寺法子(岡山理大・生地)

「山口県におけるニホンヒキガエル *Bufo japonicus japonicus* の毒分泌量の地理的変異」○徳本正(山口大・院・創成科学)、西川京佑(山口大・理)、石丸凌成(山口大・理)、小島涉(山口大・院・創成科学)

「広島県廿日市市宮島のヤマザクラ野生集団の保全に関する基礎研究(予報)」○坪田博美(広島大・瀬戸内CNセ・宮島、広島大・院・統合生命)、増田武彦(宮島弥山を守る会)、大本聖美(宮島弥山を守る会)、岩藤綾子(宮島弥山を守る会)、ファンクイン=チ(広島大・院・統合生命)、中原-坪田美保(千葉県中央博・共同研究員)

「広島県芦田川水系における絶滅危惧種スイゲンゼニタナゴの分布状況」○柴杉杉、森内海渡、勝原光希、中田和義(岡山大・院・環境生命自然科学)

「オスアリの性成熟のタイミング」○古賀理美(岡山大・院・環境生命)、後藤彩子(甲南大)、宮竹貴久(岡山大)、藤岡春菜(岡山大)

「高知県の常緑広葉樹林に生育する維管束着生植物 12 種の最下着生高度における光環境」○松原有輝、比嘉基紀(高知大・理工)

【口頭発表】(5月12日)

「島嶼と都市部におけるニホンヒキガエルの小型化」○石丸凌成(山口大学・理)、西川京佑(山口大学・理)、徳本正(山口大学・院・創成科学)、小島涉(山口大学・院・創成科学)

「雄性両全性同株の異なる生態型における花の性決定に温度が与える影響」志村優衣(岡山大・農)、成田あゆ(北海道立総

合研究機構)、今博計(北海道立総合研究機構)、勝原光希(岡山大・環境生命自然科学)、丑丸敦史(神戸大・院・人間発達環境)、○宮崎祐子(岡山大・環境生命自然科学)

「山口県秋穂地域におけるカワウの食性調査と耳石を用いた食性調査の有用性」○渡邊華奈(山口大・院・創成科学)、磯村晃良(山口大・院・創成科学)、細井栄嗣(山口大学・院・創成科学)

「コクヌストモドキにおける雄の加齢と父性の関係」○松村健太郎(岡山大院・環境生命)、川上怜也(香川大院・農)

「マダコの個性と摂餌戦略の関係」○山田真悠子(島根大・自然科学研究科)、小野廣記(島根大・生資)、佐藤成祥(東海大・海洋)、広橋教貴(島根大・生資)

「石見銀山の遺跡集落に侵入したハチク林の開花と今後の管理への提言」○小林剛(香大・農)、鈴木重雄(駒大・文)、久本洋子(東大院・農)、小林慧人(森林総研・関西)、和田讓二(緑と水の連絡会議)

「都市-中山間勾配における在来一年草ツユクサの開花フェノロジーの多様化と集団の存続可能性」藤原日向、山口寛登、中田和義、○勝原光希(岡山大・院・環境生命自然科学)

「琵琶湖周辺に生息する淡水生巻貝カワニナ属 12 種の特徴的な性比に関する研究」○濱崎寛太(高知大・総合人間自然科学研究科)、三浦収(高知大)

「送粉者は同居者:ススキ営巣性のツヤハナバチ類によるススキ寄生性のナンバンギセル(ハマウツボ科)の送粉」○渡津友博(広大・院・国際協力)、平岩将良(近畿大・農)、丑丸敦史(神戸大・国際人間科学)、保坂哲朗(広大・院・先進理工)

「オオサンショウウオの種間交雑に関する深刻な課題 ~広島県の現状について~」○清水則雄(広島大・博物館)、阿部勝彦(広島市安佐動物公園)、田口勇輝(広島市安佐動物公園)、池田誠慈(広島大・博物館)、三浦郁夫(広島大・両生類研究センター)、桑原一司(日本オオサンショウウオの会)

「四万十川森林流域では日照時間が長い年ほど渓流水の溶存成分濃度が増加する」○稲垣善之、酒井寿夫、篠宮佳樹、吉永秀一郎、鳥居厚志、山田毅、野口享太郎、森下智陽、藤井一至(森林総研)

「鳥取県におけるスナガニの分布状況~2008年と2023年の比較」○唐沢重考(鳥取大・農)、森美賀(鳥取大・農)

【高校生研究発表】(5月11日)

「モジホコリの合理的な経路設計に水が与える影響」富松芽生、小西優衣、蔵田帆乃香、森藤胡々、山内優佳、國府島将平(岡山県立岡山一宮高等学校)

「コンポストを用いたアメリカザリガニの肥料化」岩崎讓士、高橋咲貴、趙世嘉、中島涼音、牧野煌世、藤江一成、中田和義(岡山県立岡山一宮高等学校)

「環境ホルモンの分解について」池上仁、北川英一、末藤奏志、宮森遥斗、山根有希子、大平進(岡山県立岡山一宮高等学校)

「メダカ(*Oryzias latipes*)によるアオコ類(*Microcystis*)の摂食について」高木光士、平川真太郎(私立金光学園高等学校)

「米で菌が増える条件」川元桂太郎、桑田亮太、岡邊みのり、板崎璃子、松嶋有美(私立金光学園高等学校)

「街中を飛bee 周り人助け」斉藤悠太、中野光梨、吉村和真、岡元将太(創志学園高等学校)【優秀賞】

「植物性乳酸菌の単離と比較」竹田結奈、塩田青以、安尾のぞみ、木村健治、森山雄介(岡山県立玉島高等学校)

「野草「クサギ」が飼育動物に及ぼす影響」山田梨央、小川結、白井志弥、藤森由奈(岡山県立高松農業高等学校)

「香川県のカジカ大卵型の生息調査と生物群集解析」大田侑来、宮崎和歩、川田正明(香川県立高松桜井高等学校)【優秀賞】

「広島県安芸太田町のオオサンショウウオと住民の意識」本宮芳太郎(広島県立加計高等学校)

「今日の推しはキミにきめた!〜ワクワク教材開発への道〜」厚井陽菜子、清老愛唯、竹中美智、山本有莉、田中乃愛、土居帆乃愛、新宮興(安田女子高等学校)

「メキシコサラマンダーの最適な飼育環境の調査」富内亜依、坂野大洋、濱田陽太、淀優星、片岡美貴、記本貴寛(徳島県立徳島科学技術高等学校)

「酵母の液胞がアミノ酸を蓄積する理由について」亀岡真由、川内凜子、尾坂夏味、関藤孝之(愛媛県立松山南高校)

「絶滅危惧種マツカサガイの非繁殖期における繁殖誘発技術開発へ向けた取り組み」松岡瑠奈、松本浩司、高田裕美(愛媛大学附属高等学校)【最優秀賞】

「灌漑で死亡する希少淡水性二枚貝を減らすための提案」坂田彩夏、楠本百花、天野颯人、十河柁基、松岡瑠奈、松本浩司(愛媛大学附属高等学校)

「西条市千町地区における里山生態系と訪花性カミキリムシとの関係を探ろう」塩崎由依、高橋奈々、東睦雄、浅野悟史(愛媛県立西条高等学校)

【公開シンポジウム】(5月11日)

『いきものってダイバーシティ』

16:00~16:05 はじめに

16:05~16:40 「作物のDNAと品種改良」門田有希(岡山大学・学術研究院・環境生命自然科学学域(農))

16:40~17:15 「昆虫の神秘的な行動と生態」宮竹貴久(岡山大学・学術研究院・環境生命自然科学学域(農))

17:15~17:50 「環境DNA観測網「ANEMONE」:ネイチャーポジティブと生物科学の貢献」近藤倫生(東北大学・大学院生命科学研究所)

17:50~18:00 総合討論

【総会】(5月12日)

a. 報告事項

1) 庶務報告 学会誌発行部数、地区会員の動向(2023年12月末現在247名、昨年度から2名減)

2) 地区選出委員(代議員、自然保護委員)からの報告

3) 地域シンポジウム等補助金の公募アナウンス

b. 審議事項

1) 以下の次期役員会構成員(2024年5月~2026年5月)について承認された。

地区会長 山田俊弘(広島大学)

庶務幹事 保坂哲朗(広島大学)

会計幹事 中林雅(広島大学)

鳥取県幹事 衣笠利彦(鳥取大学)

島根県幹事 倉田健悟(島根大学)

岡山県幹事 勝原光希(岡山大学)

山口県幹事 山田太平(水産大学校)(※総会後に決定)

徳島 飯山直樹(エコー建設コンサルタント)

香川 小林剛(香川大学)

愛媛 畑啓生(愛媛大学)

高知 鈴木紀之(高知大学)

広島 渡邊園子(広島大学)

代議員 鈴木紀之(高知大学)

自然保護委員会 比嘉基紀(高知大学)、岡浩平(広島工業大学)

2) 2023年度会計決算について承認された。

3) 2024年度会計予算について承認された。

4) 次々期会長選挙の実施方法について、本会会長選挙と同時に電子投票で行うことが承認された。

5) 繰越金の活用方法について、中国四国地区の失われゆく自然・社会-生態システムをテーマにした本・写真集の制作・出版に関して助成を行うことが承認された。

6) 2025、2026年度合同支部大会について、それぞれ愛媛(2025年度)および鳥取(2026年度)で開催することが承認された。

九州地区会

(1) 2023年度地区委員会・総会

地区委員会 2023年5月11日(木) オンライン

地区総会 2023年5月27日(土) 熊本大学

(2) 地区大会

第67回三学会九州支部・地区合同大会

会期: 2023年5月27日(土)、28日(日)

会場: 熊本大学黒髪南キャンパス

【生態学会員による口頭発表】

- 天野孝保(長大・院・水環)・山口典之(長大・院・水環)「都市部—農村部による環境勾配におけるツバメの営巣地選択の比較」
- 徳田 誠、永淵拓歩(佐大・農)、佛坂安恵(神崎市)、池上真木彦(国立環境研)「佐賀平野における近年のカササギ生息数の変動とその要因」
- 西嶋武頼、鈴木佑弥(九大・システム生命)、立田晴記(九大・理)、中田兼介(京女大・現代社会)「トゲゴミグモの不完全な交尾器破壊がメスの再交尾に与える影響」
- 柳澤隆平(九大・院・理)、諏訪竜一(琉大・農)、高梨琢磨(森林総研)、小野寺隆一(東北特殊鋼)、立田晴記(九大・院・理)「基質振動によるダブル効果:トマト害虫密度と果実収量に与える影響」
- 久米篤(九州大・農院)、原亮太郎(九大・生物資源科学府)、松永孝治(森林総研・九州育種場)、細川貴弘(九州大・理院)、渡辺敦史(九州大・農院)「熊本県林木育種センター九州育種場におけるマツヘリカメムシの個体群動態」
- 細川貴弘(九大・理)、中脇琢磨(九大・シス生)、渡邊修人(九大・シス生)「ツチカメムシと腸内細菌の共生関係維持機構」
- 児玉建(九大・院・システム生命科学)、立田晴記(九大・院・理)「ツクツクボウシ主鳴音における二つのパートが他個体オスの行動に与える影響の比較」
- 樋口優月(九州大学・システム生命)、立田晴記(九州大学・理)「南西諸島のノコギリクワガタに見られる形態変異と緯度クライン」
- 矢野文士、古川晶啓(佐大・院・農)、日南瑤(佐大・農)、尾崎一天、澤島拓夫(近大・院・農)、徳田誠(佐大・農)「日本で確認された菌食性幼生生殖タマバエの同定および分布」
- 田中瑛未(熊大・院・自然科学)、川谷健人(熊大・院・自然科学)、嶋永元裕(熊大・合津マリン)「熱水域固有種 *Stygiopontius senokuchiae* 幼体の成長率の雌雄差及び年齢構成の空間変異」
- 石原明日斗(熊大・院・自然科学)、逸見泰久(熊大・水循環セ)「ハクセンシオマネキの個性:繁殖行動と熱耐性の違い」
- 葛芳旭(熊大・院・自然科学)、山田勝雅(熊大・水循環セ)、逸見泰久(熊大・水循環セ)「アオサの堆積が干潟のマクロベントスの群集構造に与える影響」
- 【生態学会員によるポスター発表】
- 山本健貴(熊本高専・生物化学)、宮本健太郎(熊本高専・生物化学)、木原久美子(熊本高専・生物化学)「熊本高等専門学校内におけるアリの分布調査の試み」
- 松本くるみ、細川貴弘(九大・理)「ミヤコキンカメムシの共

生細菌4系統の機能的な違い—実験室内環境下と塩ストレス環境下での比較」

- 將口栄一(沖縄科技大・マリンゲノミックス)「沖縄に生息するサンゴとシャコガイから単離された褐虫藻2種のゲノムに存在する超保存配列は遺伝子クラスターの水平伝播により生じた?」

(3) 地区例会

第596回 5月20日(土) 沖縄(オンライン開催、沖縄生物学会と共催)

公開シンポジウム「沖縄への自然史博物館設立活動の過去、現在、未来」

第597回 7月8日(土) 鹿児島(鹿児島大学理学部2号館2階220講義室)

堤英輔(鹿児島大学水産学部)「鹿九州周辺の沿岸域と黒潮域における鉛直混合過程研究と海洋環境」

第598回 11月11日(土) 熊本(熊本大学 黒髪南キャンパス 黒髪南C5イノベーションプラザ)

岡本浩太郎(熊本大・自然科学教育部)「ササゴイのBait-fishing における2つの戦術」

檜垣匠(熊本大・大学院先端科学研究部)「植物の受精卵極性化の画像解析」

荒木正健(熊本大・生命資源センター・ゲノム機能分野)「可変型遺伝子トラップクローンデータベース:EGTC」

第599回 11月11日(土) 佐賀(佐賀大学農学部1号館1階第3講義室)

井上健(佐賀大学農学部/佐賀県食肉衛生検査所)「きせいちゅう結び-新しい食中毒、トキノプラズマ、蟻の行方-」

山本土温(鹿児島大学大学院連合農学研究科)「根粒菌接種が薬用植物カンゾウのバイオマス生産およびグリチルリチン酸生産に及ぼす効果」

古川晶啓(佐賀大学農学部)「国内で確認された幼生生殖タマバエとその多様性」

第600回 11月18日(土) 宮崎(宮崎大学農学部北棟2階第二会議室)

湯浅高志(宮崎大学農学部植物生産環境科学科 作物学研究室)「乾燥耐性マメ科作物ササゲのアブシジン酸長距離シグナル」

和田葉子(宮崎大学農学部海洋生物環境科学科 行動・生態学研究室)「海岸に生息する生物たちの種間相互作用」

第601回 12月9日(土) 福岡(九州大学理学部ビッグリーフ202号室)

風間智彦(九州大学大学院農学研究院)「植物ミトコンド

リアが引き起こすオス殺し現象」

齋藤武尊(九州産業大学生命科学部生命科学科)「魚類炎症反応におけるアナフィラトキシンC5aの役割」

児玉建(九州大学大学院システム生命科学府)「ツクツクボウシの鳴き声音声に対する同種オスの反応」

第602回 12月9日(土)鹿児島(鹿児島大学理学部220号講義室)

【高校生の研究発表】

○国分高校・サイエンス部2年生生物班①「みんなの知らないコケの世界～カビゴケの生態を解き明かせ!～」

○錦江湾高校・生物研究部クモ班「建物に巣をつくるジョロウグモに種内競争はあるのか?」

○曾於高校・科学部「雑草(シロツメクサ *Trifolium repens*)からの銅アンモニアレーヨンの開発～今こそレーヨン! 120年前の技術でSDGs～」

【特別講演】

安田悠子(鹿児島大学農学部農林環境科学科)「生息環境に応じた樹幹形成の可塑性」

第603回 12月9日(土)長崎(長崎大学水産学部本館2階大会議室)

○津村聡志、飯間雅文(長崎大水産・環境科学総合研究科)「長崎市周辺4海岸における23年間の海藻フロラの変遷」

○北大世、桑野和可(長崎大・院・水産)「スジアオノリにおける培養システムの改良と鉄源の検討」

○大島奈津子、桑野和可(長崎大・院・水産)「アカモク母藻の室内育成の試み」

○小野友梨夏、土田真平、平坂勝也(長崎大院・水産)、明正大純(静岡県立大・食品栄養科学)、藤本真悟(琉球大・熱帯生物圏研究センター)、八木光晴(長崎大院・水産)「環境DNA技術で明らかにした九州西部のニホンウナギ(*Anguilla japonica*)とオオウナギ(*A. marmorata*)の地理的分布」

○土田真平(長崎大・水産)、小野友梨夏(長崎大院・水産)、平坂勝也(長崎大・水産)、明正大純(静岡県立大・食品栄養科学)、藤本真悟(琉球大・熱帯生物圏研究センター)、八木光晴(長崎大・水産)「浮体式洋上風力発電施設はマアジ(*Trachurus japonicus*)を引き寄せるのか?環境DNAからのアプローチ」

第604回 12月16日(土)大分(大分大学旦野原キャンパス教養教育棟1F14号教室)

○高野裕樹(大分生物談話会)「伝説・ミイラ・文化財～オオウナギ研究と二村薫先生～」

○伊藤龍星・原朋之・白樫真(大分県農林水産研究指導センター水産研究部)・平澤敬一・平川千修(大分県水産振興課)「中津市沿岸に生息する希少生物ヒガシナメクジウオ」

○小材隆文(大分生物談話会)「大分市市街地におけるフクロウのロードキルの記録」

○原美南・永野昌博(大分大学理工学部)「祖母・傾・大崩山 ユネスコエコパークにおけるESDプログラムの開発と実践」

○中村茂(日本野鳥の会大分県支部)「大分県内における着目すべき鳥類の観察・標識記録」

○炭本悟朗(NPO法人おおいた生物多様性保全センター)「水の子島の生物類調査報告」

○星野和夫(大分マリーンパレス水族館「うみたまご」)・中尾拓貴(大分県農林水産研究指導センター水産研究部)・比野友亮(北九州市立自然史・歴史博物館いのちのたび博物館)「大分県から得られた標本に基づく九州2例目のキリアナゴ」

○永井大翔(琉球大学大学院理工学研究科)・今井秀行(琉球大学理学部)「大分県に迫る外来淡水性エビ類の脅威」

○安田雅俊・森澤猛(森林総研)・森田祐介(NPO法人おおいた生物多様性保全センター)・宮村栄一(大分生物談話会)・島田健一郎(大分市)・杉浦嘉雄(NPO法人大分環境カウンセラー協会)「高島における外来リスの防除完了と最近の生態系の変化」

○渡辺伸一(日本希少鳥類研究所・麻布大学)「オオミズナグドリ瀬戸内海繁殖集団の保全:高島における繁殖成功率と採餌海域は?」

○森田祐介(NPO法人おおいた生物多様性保全センター)・安田雅俊(森林総研)・宮村栄一(大分生物談話会)・西田伸(宮崎大学教育学部)「別府市で確認されたクリハラリス」

○村上康明(大分きのこ会)「ユネスコエコパーク域内の興味深いきのこ」

○後藤聡(NPO法人おおいた生物多様性保全センター)「坊ガツルの鳥類」

○中渡瀬真樹(NPO法人おおいた生物多様性保全センター)「坊ガツルの水環境-16年目の比較-」

○大島和伸(長者原ビジターセンター)「山火事から3年後の立中山ミヤマキリシマ再生状況」

特別企画

第三次おおいたレッドデータブック見直し検討会

「大分県レッドデータブック2022セミナー-レッドデータブックおおいた2022の見直し概要報告-」

(4) 地区会報84、85号発行

書評

原田英美子編「琵琶湖集水域の環境メタロミクス」(2024)
320pp. アグネ技術センター ISBN:978-4-86707-018-5 C3040 定価 3,960 円

新天地に移り、生活環境も研究環境も新しくなった私に、書評執筆の依頼が飛び込んできた。研究材料もそれまで扱っていた巻貝から植物へと転換して、新たな研究を始めた矢先である。琵琶湖集水域を舞台にした「環境メタロミクス」。これはまた私にとっては聴きなじみのない言葉であったが、滋賀県に移り住んだ身としては興味深い著書である。とにもかくにも、メタロミクスとは何か?という疑問を解消しなければならない。私は表紙に琵琶湖と周期表がデザインされた本書を手に取り、その答えを求めた。

表紙をめくると、序文、目次の後に本書の構成と各章の概要がまとめられていた。本書は全 20 節のオムニバス形式で、琵琶湖とその周辺環境を舞台にしたさまざまな分野の研究が紹介されている。この概要は私のような新参者にも非常にわかりやすく、おおまかな内容をつかむことができた。また、本書に登場する滋賀県内の地名を記した地図が掲載されているため、読者が地理的なイメージをもちやすくなっている。

第 1 章 (全 1 節) は概論であり、ここに、環境メタロミクスは生体内を構成する金属元素の機能と役割を解明することで、生命と地球環境を理解する学問分野であると述べられている。また、本章では琵琶湖およびその集水域の地理や、琵琶湖の生態系にとって重要な働きをもつ全層循環について知ることができる。それらとメタロミクスの関わりに触れることで、本書を理解するための基礎的な知識を読者に与える役割を担っている。

第 2 章 (全 3 節) に進むと、「美味しいメタロミクス」という魅力的なタイトルが出迎えてくれる。本章は水産資源や食文化に焦点を当て、ビワマス、セタシジミ、イシクラゲといった琵琶湖とその周辺地域に関わりの深い食材を取り扱う。ここで紹介される研究は、メタロミクスによって食料資源の特徴を理解し、その保全や効果的な活用につなげることを目指すものである。第 3 節で取り上げられているイシクラゲは、かつて滋賀県の姉川流域を中心に食されていた藍藻である。現在はイシクラゲを地域の特産物として復活させるプロジェクトが進行しているようであり、地域振興の起爆剤となるのか、興味深いところである。

第 3 章 (全 4 節) と第 4 章 (全 3 節) を読むと、環境メタロミクスが基礎から応用までいかに幅広い研究と関わりがあるかを実感する。第 3 章では琵琶湖とその周辺地域に自生する植物を主役に抜擢し、生態学的研究から地域との関わりや産業利用に焦点を当てた研究まで、幅広く紹介されている。続く第 4 章は生物による鉱物生産に着目し、真珠をつくる貝類の生態的特

徴や養殖の現状と、琵琶湖水圏の金属動態について述べられていた。私にとって真珠が身近な存在であるかと言われるとそうではないが、比較的親しみやすいテーマである。将来は真珠を片手に本書で得た知識を語れるような人間になりたいが、まだまだ道は長い。

本書で紹介される研究には、生物学の実験・解析手法のほかに、X 線を用いた物質の構造分析や金属元素の化学形態分析を利用したものが多く含まれる。メタロミクスの発展を支えるこれらの微量金属分析技術について、具体的な方法を語ることに焦点が当てられたのが第 5 章 (全 5 節) である。本章の内容はやや専門的であるが、環境メタロミクスにおける最前線の技術について知ることができる。また本書は第 5 章に限らず、全体的に手法が具体的に記述されていることが多い。これにより、研究の成果がどのようにして得られたのかを理解しやすくなっているのも本書の特長である。

そして最後の第 6 章は、また新しい切り口で幕を開ける。ここでは生物学から少し離れ、岩石、化石、文化財を対象にして古の琵琶湖のすがたをひもとく。私は滋賀県に移り住んで初めて知ったのだが、琵琶湖は 400 万年以上の歴史をもつ世界有数の古代湖である。琵琶湖周辺の化石や地層を調べることで、長い歴史をもつ琵琶湖の古生物相や環境変遷を明らかにできるのである。最後は、過去の人類が残した文化財の調査に金属分析技術を利用する研究が紹介されており、メタロミクス技術における文理融合のポテンシャルを感じる締めくくりとなっている。

本書はいくつもの異分野の研究が「琵琶湖」と「金属」をキーワードに一堂に会した著書であり、生物学以外にも、化学、地球科学、人文学などの研究に巡り会うことができた。また、1 節あたりのページ数が平均 14 ページと比較的コンパクトにまとめられているのも特徴であり、専門外の内容でも読みやすかった。環境科学やメタロミクスに興味のある方はもちろんであるが、琵琶湖集水域の環境や歴史・産業応用に関わる研究を楽しみたい方にもおすすめである。

(京大大学生態学研究センター 横溝匠)

綿貫豊・高木正興編「野外鳥類調査ガイド」(2024) 200pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17185-3 定価 4,840 円

鳥といえば小さい頃に教えられた特訓方法を思い出す。鳥を観察するにあたっては素早い鳥の動きについていくための動体視力が必要らしく、それをてっとり早く鍛える方法として教えられたのが、線路がよく見える場所から通りすぎていく列車の中にいる人々が何をしているのかを逐一当てていくといった特訓方法だった。今となっては本当にその効いたのかわからないが、ちょっとずつ車内の人が何をしているのかわかるようになった記憶がある (昔は本や新聞を読んでいる人がほとんどだったが、久しぶりに故郷のあの場所で東海道線の車内を見れば、多くの

人はスマホに夢中なのだと思う)。

前置きが長くなってしまったが、この 20 年の間に自身の動物視力や聴力に頼らずとも様々な文明の機器や新しい手法によって野外の鳥類を調査できるようになったことは、門外漢の私であっても少しは聞きかじっている。ただ、今まで鳥類の調査方法を網羅的に記載した和書は以外と無かったと思う(本書の「はじめに」にもそのように記載があったので間違いでは無いのだろう)。私がよく扱う河川水辺の国勢調査の中にも鳥類の項目があるが、鳥類の調査方法に詳しく無い私はなかなかその関連データ群に手を出すことができない。そんななか、とてもキャッチーでわかりやすいタイトルである本書は専門外の私でも少しは鳥類の調査方法の最新情報を知れるのではないかと思いい手に取った次第である。

本書は第 1 章から第 6 章までで構成されており、第 1 章から第 4 章まではそれぞれ鳥類に関する何を明らかにしたいか? に応じて、必要な章を読めるようになっている。その後、第 5 章は絶滅危惧種保全および個体群管理手法、第 6 章は環境影響評価調査法といったさらに実践的な内容について背景情報や実際の方法を交えながら述べられている。

第 1 章の個体群調査法では、ラインセンサスやスポットセンサスといった古典的な個体数調査に始まり、近年多く利用されつつあるドローンを使用した上空からの調査等についても紹介がなされている。加えて、捕獲調査を実施する際に必要な捕獲許可についても用具の解説から機器に関する法律まで、実際に調査をする際に必要な情報が簡潔にまとめられており、これから調査準備を行う場合に大変有益な情報であると感じた。第 2 章の繁殖生態調査法では、調査に入る前の情報収集や予備調査の仕方についても記載があり、事前に読んでおくためになる内容が多かった。また、この章の中にある巣箱に関する記載では、巣箱のタイプ別の模式図が描かれており、各種は営巣する場所によって巣箱のタイプがかなり異なることがよくわかった。加えて、音声の録音と解析に関する記載では、具体的な録音手法や解析手法に用いることができる音声解析ソフトが紹介されているため、取得した生データを解析する際の足がかりになると思われる。第 3 章の群集・生態系調査法で特に読者にとって有益なのはハビタットの記載と質の調査の項だと思われる。局所植生や餌生物現存量といった実測から得られるデータの取得方法や、リモートセンシングや GIS などから得られる景観構造や海洋環境などに関するデータが得られるサイトなどを記載しており、群集・生態系調査の開始前にどのようなデータセットを取得できうるか具体的に検討するのに有用と考えられた。第 4 章の形態調査法では、統計学的解析を見据えながら定量化し、データを取得する方法について紹介されている。特に鳥類の各部名称についても静止時および飛翔時の全身の模式図とともに紹介されており、そもそも図鑑を検索する際の部位の名称

を確認するのに役立つと考えられる。さらに、形態から種や亜種の同定を行う際の具体的な流れについても記載があり、初学者にとって大変有用であると考えられた。

第 1~4 章とは毛色が少しかわった第 5 章と第 6 章内で、特に着目したいのは個体数管理の論理と実践かと思われる。個体数管理の考え方からはじまり、関連法案についてもかなり詳細に触れられており、全くの門外漢である私であってもわかりやすく、順を追って読み進めることができた。

以上より、本書は鳥類をこれから勉強したいと思っている高校生や大学生にもおすすめだが、門外漢であるが、鳥類に関する業務等を実施するものにとってもとても有用な書籍であると思われるので、ぜひ手に取って内容を確かめてみてほしい。

(土木研究所流域水環境グループ流域生態チーム 梶ちがや)

日本森林学会編「図説日本の森林」(2024) 202pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18065-7 定価 5,280 円

この書評は生態学会のニュースレターに掲載されるため、主に生態学に関心のある日本生態学会員が読むことを想定して書いている。一般の方が読んだ時に受ける印象とは異なるだろうということはお断りしておきたい。

この本は朝倉書店の「図説日本の樹木」「図説日本の植生」「図説日本の湿地」に続く「図説シリーズ」であり、3 部構成からなる 200 ページほどのカラー本である。日本各地の特徴的な森林を解説した「森林を読み解く」という第一部が全体のボリュームの半分を占め、残りが第二部「生き物たちの森林」と第三部「森林と人」である。「図説」であるから当然のことながら、写真や図を中心にそれぞれのトピックが簡潔にまとめられた、数多くの執筆者による森林に関する多分野の解説書となっている。

第一部は各地の森林をよく知る研究者が各自の視点から解説しており、その森で過去に起こったことの紹介など、自分が行った経験のある森でもへえそうだったんだと納得する、贅沢な現地ガイドとなっている。私自身は優占樹木種の機能的地理変異や森林の長期動態比較などを研究テーマにしており、鳥の観察も趣味なので各地の森林を訪れる機会が多い。行ったことのある森に添えられている写真は、その森の特徴をよく捉えていて現場を想像しやすいことが分かる。行ったことのない森ならそれぞれの解説者と一緒にぜひ現地を訪れてみたいと思わせる。惜しむらくは、1 ページしか割かれていない森の場合もっと教えて欲しい! 勿体無い! と思ってしまうし、この記事を読んでぜひ行ってみたいと思っても詳細な場所や行き方が記されておらず、一人では現地に辿り着けない森中にはあるかもしれない(巻末の基本情報も位置精度が粗いのが残念である)。

第二部は見開き 2 ページで森に棲む生物の役割や分類群ごとの多様性について解説している。鳥類に関する幾つかのトピック

クの中には少ないスペースでうまくまとめられているものもあって感心する一方、森を枯らすという同じ役割がシカ、菌類、昆虫、菌と虫、と繰り返し出てきたりする。森を維持する、森の中での関わり合い、も場所を変えて登場するので、編集にも少し工夫があっても良かった。特定の生物が増え過ぎたことによる森林への影響が紹介されている一方、減り過ぎた場合の影響が取り上げられていないことも、生態系サービス評価には常に多角的な視点が必要であるという観点から気になってしまう（そもそも増え過ぎ減り過ぎてどう定義するのかという問題もあるだろう）。

生態学会員にとっては、日本森林学会の得意分野である森と人との関係を扱った第三部がもっとも興味深く読めるのではないだろうか（少なくとも私はそうでした）。森の信仰、地方文化、法制度、金融など、この方面の知識に疎い者にとってはより深い学習のためのまたとない取っ掛かりとなる内容を含んでいる。森に限らず、自然資本と人間社会の関係を過去から捉え直し、双方を組み込んだシステムとして新たな自然と人間の関係を構築していくことが現代に生きる我々に求められている。本書をはじめに手に取った時には第三部にやや違和感を感じたが、これこそが編集した方々の想いなのではないだろうか。

（東京大学 日浦勉）

小池伸介・北村俊平編著、きのしたちひろイラスト『タネまく動物 体長150センチメートルのクマから1センチメートルのワラジムシまで』（2024）152pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-7255-7 定価1,980円

昨今の技術進歩に伴う生態学の進展は著しい。古くは航空写真、そして衛星画像の分析から進んで、いまやドローンの時代だ。かつてはなかなか得ることができなかった、必要な場所の必要なタイミングでの「鳥の視点」をいまでは容易に手に入れることができる時代となった。

直接観察オンリーだった植物と動物の相互関係の研究も、自動化が著しく進んだ。どの動物がどのような植物の果実を食べて、種子を運ぶか？これは動物による種子散布の基本中の基本、かつ根本的に重要な情報である。むかしは長時間、果実の近くで張り込んで、どんな動物が来るのかをワクワクしながら待ったものだった。しかし哺乳類を対象とした種子散布研究は、カメラトラップ技術の発展とともに大きく進んだ。フィルムからデジタルへ切り替わり、電池の寿命も長くなった。そして何よりも機械自体の価格が安くなった。かつては特殊な用途の特殊な機械だった赤外線センサーを使った自動撮影カメラが、いまでは犯罪防止などにも多用される日常的な道具となった。また赤外線センサーが反応しない“変温動物”についても、インターバル撮影機能などを用いて自動的に大量のデータが得られるようになった。

このような技術の発展もあって、劇的に情報量が増えた動物による種子散布の成果を一般読者向きにわかりやすく示してくれたのが『タネまく動物 体長150センチメートルのクマから1センチメートルのワラジムシまで』である。上に述べたような過去の研究からの著しい進展を実感するには、1991年発刊の『種子散布 助けあいの進化論1、2』（上田恵介編著、築地書館）と読み比べてみれば一目瞭然である。取り扱っている種子散布に関与する動物の多様性はもちろんのこと、示されているデータの質と量、それに伴う生態学的そして進化的な議論の射程の広がりには30余年の隔たりを感じさせるに十分である。また本書で示されたイラストレーションがじつにすばらしい。このように親しみやすく、かつ科学的にも正確なイラストは、執筆者との綿密な共同作業で描かれたことは間違いなからう。

せつかくの新年なので、夢を語りたい。もちろん観察の自動化によって、劇的に情報量が増えたのは間違いない。しかし、現在の自動撮影カメラでは、比較的狭い固定された視野内での情報しか得られない。実際、高さ数十メートルの大木にたくさん実っている果実にやってくる鳥や獣を観察するときには、超広角の視野で動物を探し、いったん動物を発見すると超望遠で対象に迫るといった複雑な作業をおこなっている。また複数同時に動物が視野に入ればどの個体を選ぶか、また、そもそも観察対象の樹木をどう選ぶかという方法的な問題があり、これがさまざまな観察バイアスを生じるものとなっている。しかもその全プロセスを記録して、後日の検証に耐えるものには誰も成功していない。このようなことが実現すると、どのような動物が果実の除去にどれくらい貢献しているかがはっきりわかるであろう。もっとも軍事用には「超広角の視野で対象を探し、いったん対象を発見すると超望遠で迫る」技術開発がAIとロボット活用で進んでいるのに違いない。

もうひとつは、種子の視点である。一部の貯食散布ではおこなわれているようだが、母体に着いている段階で大量の種子をマーキングして、その運命を追いかけること。動物に食べられるだけでは、まだ種子散布としては初期段階に留まっている。運ばれた種子の散布後の追跡ができなければ、まだ本質には迫っていないというべきであろう。これもバイオロギングなど、今後の技術の進展に期待したい。

いずれにせよ、このような初夢まで見せてくれるような本であった。編著者であるおふたりの労を多としたい。

（きょうと生物多様性センター長・京都大学名誉教授 湯本貴和）

エリカ・B・ローゼンブラム著、宮下直監訳、深野祐也・安田仁奈・鈴木牧訳「グローバル変動生物学」(2024) 300pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18064-0 C3045 定価 13,200 円

人口の増加、人間社会の成熟と発達に伴い、人間活動による地球への負荷は飛躍的に増加している。地球上のあらゆる生態系が、さまざまな環境変化（必ずしも人為的なものに限定されない）にさらされている。本書冒頭で提示されているように、グローバル変動生物学はまさに、「地球規模での環境変化と生物・生態系の関係についての新たな理解を進める」学際領域であり、生物の生存環境や生態系の急速な変化が進む現在、緊急性の高い分野である。本書は、グローバル変動生物学における学術的経緯や方法論を皮切りに、地球上の生命の歴史、地球環境変化に対する生物の応答、さらに生物群集や生態系レベルでの環境応答、環境保全の実践と将来展望、という流れで、個々のセクション・章が相互に関連し合うように記載されている。それゆえ、グローバル変動生物学の基礎を体系的に学習するのに最適な教科書であると感じた。セクション間のつながりは保ちつつも、各章は独立して読むこともでき、まずは興味のある章から読んでみるということも可能である。

本書は、大学講義の立ち上げをきっかけとして生まれたグローバル変動生物学の統合的なテキストということで、地球環境に関わる広い学問領域を専攻する学部生にとって、ぜひ手元に置いておくべき書である。各章のトピックには、近年の研究事例がとてつもない「間合い」で、数多く組み込まれており、実際の研究のイメージをつかみやすくする工夫がなされている。また、引用されている図のほとんどに読者への問いかけが記されており、読者自身に考えることを促す仕組みを取り入れている。近年の研究事例に基づいて考えを深めることで、研究の種を見つけ出す好奇心が刺激され、次のページや図が気になる。その結果、本書を楽しく、スピーディーに読み進めることができる。グローバル変動生物学に関連する既存の知識体系が網羅されているため、その裏を返せば、本書には示されていない、未解明の現象や仮説についても思考を巡らせることができる。その点において、研究経験を積んだ研究者にとっても、非常に有用な書となっている。

可読性をさらに高めているのは、訳者のみなさんの的確かつ平易な翻訳であるように思う。訳者のみなさんの努力に敬意を表したい。私自身、学術的な文献に対して批判的に読む癖がついているためか、教科書とはいえ、読み進めて行く中で少し違和感のある記述が何度か表れる。しかし、そのような記述にはもれなく、訳者のみなさんによる注意書きが付されており、違和感を解消しながら読み進められる点は特筆すべきで、訳者の読み込みの深さを伺うことができる。また、本書で紹介される研究事例には、アジアや日本の事例はあまり含まれていない。この欠点を補うため、各セクションに関連して、計7つのコラ

ムが設けられている。日本の読者は、国内での最先端の研究や課題について知ることができ、本書の内容をより現実感を持って捉えることができるだろう。

グローバル変動生物学が切り拓く、地球環境変化と生物・生態系の関係の新たな理解を、社会へ浸透させ、生物や生態系の保全の実践につなげるには、多くの時間と労力を要する。本書でも言及されている、グローバル変動生物学の研究体系を環境正義・社会正義、社会変革と統合する試みは、グローバル変動生物学の社会への波及と浸透を加速させるだろう。このグローバル変動生物学の学際的可能性に関して、一歩踏み込んだ解説や具体的なアプローチの紹介がもっとあっても良かったように感じたが、そこは読者自身に考えてほしいという著者の意図なのかもしれない。専門分野を厳密に要求しない書であることを再度強調し、さまざまな読者に手にとって読んでいただきたい一冊です。

(横浜国立大学大学院環境情報研究院 佐々木雄大)

高野温子・三橋弘宗編「自然史博物館の資料と保存」(2024) 192pp. 朝倉書店 ISBN: 978-4-254-10306-9 定価 3,740 円

本書は表題の通り、自然史博物館の標本資料全般について、整理、保存、デジタル化、活用、展示まで扱う書籍となっている。これまで、標本の作成や管理について取り扱った書籍はいくつかある。たとえば「標本の作り方: 自然を記録に残そう」(大阪市立自然史博物館編、東海大学出版、2007年)はアマチュアを含む、自然観察者が自ら記録を残すために標本を作る手法を解説した本であった。「標本学: 自然史標本の収集と管理」(国立科学博物館編、東海大学出版、第2版 2014年)は、国立科学博物館での管理水準と目標が語られるものの、おいそれと真似できない重厚なものであった。

自然史資料を扱う上で、何を基本線として重視すべきなのか、標本を保存・管理・利用提供、活用していくうえでのベストプラクティスを教科書的に示した書籍は「自然史博物館の収集活動」(柴田敏隆、太田正道、日浦勇編、日本博物館協会、1973年)まで遡らなければならぬ。さすがにデジタルもDNAもない時代のスタンダードだけでは現在の博物館をカバーできない。現代的な水準の教科書としてスタンダードを探るよう、広範な課題を網羅することにこの本は努力を払っている。「博物館学」という分野があり、学芸員資格を取得するためにはそのいくつかの科目を履修する必要がある。その中には「資料保存論」や、「展示論」、「経営論」などもある。しかし、博物館は非常に広範な分野の多様な資料を扱う上、現実には日本の博物館の大半は歴史系などの人文科学あるいは美術系の博物館である。そのため学芸員養成課程の教科書の多くも、自然史系の情報はわずかに一節を割くばかりであった。学芸員教育の上でも自然史博物館の実態をリファレンスできる実践的教科書の登場を歓迎し

たい。本のタイトルは資料保存論めいているが、展示論、経営論についても章を割いている。なお、この本と全く異なるアプローチから活動を軸に自然史博物館を語る「博物館と芸芸員のおしごと」(柴 正博、東海教育研究所、2023 年)なども合わせて読むと立体的に理解ができるだろう。

この本の書評を生態学会で活動する皆さん向けに書こうと思った動機は3つある。

1.もしもあなたが、自然史博物館に就職を考えたら、あるいは職を得た場合には間違いなく参考になるだろう。小規模の博物館の場合、自然系のあらゆる資料を一人で扱わなければならない、という事態もある。大学や大学院で学んだことではとても足りないだろう。大きな博物館だったとしても、自分の専門分野以外にも広い担当分野を分担することも少なくない。先輩から管理方法を伝授されたとしても、他館での管理や標準的な方法を知っておくことも大切だ。良いところの盗み合い、だけではなく、災害時の標本レスキューに赴いたときに、オールラウンドな知識は必ず役に立つはずだ。教育を担う教員の方を含め、おすすめする。

2.あなたが博物館資料の、あるいはデータの利用者となる可能性も十分にある。博物館のデジタルデータの作成は実際どのような状態にあるのか、どういう活用がなされているのか、その概略を知ることが有用なはずだ。あるいは、あなたの研究のアウトプットが論文やデータペーパーだけでなく実際の標本を伴う場合に、博物館の標本の取り扱いや、実情を知っておくことは大切だ。あなたの研究を地域に還元し、将来にわたり再検証可能にする施設として、自然史博物館を知るリファレンスになるだろう。

3.実は大学や研究機関も、規模は小さいが重要な標本保有機関である。国内に自然史系博物館が十分な数は無い現在、皆さんの所属する施設も、標本の保存管理をしなければならないはずなのだ。それは業務としてカウントされているかどうかではない。自然を守るのと同様に、学術資料は研究者として守る必要がある。再検証可能性と将来活用を担保するものだからだ。その保存活動の手引にこの本はなるだろう。国内の大学、研究機関関係者も必携の一冊かもしれない。

このように生態学関係者にも大いに活用してほしい本書ではあるが博物館関係者は本書で満足してはいけなない。自然史標本の保存科学は国内的には全く不十分な状態で、歴史資料などの保存科学にも、国際自然史標本保存学会(spnhc.org)などと比べても、大きく遅れを取っている。本書の「トピックス」には課題の萌芽が書き込まれているが、これら一つ一つを充実させるべく、また、スタンダーをさらに検証し磨き上げるべく、自然史分野の保存科学を充実させていかなければならない。同書は科研費「自然史標本の汎用化と収蔵展示技法の体系構築」(JP 19H01366)の成果として編纂された。国内でどのように広

く自然史資料保存の必要性に付いての理解をひろげ、活動を拡充していくか、本書を起点にその議論を改めて始めたいところだ。

(大阪市立自然史博物館 佐久間大輔)

久保山京子著・福田健二監修「教養のための植物学図鑑」

(2024) 212pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17191-4 定価 4,400 円

種子植物のマクロな形態と生態を網羅的に解説した書籍である。野外で生物名を検索するための図鑑ではなく、マクロ植物学の入門本、教養書、あるいは植物図鑑を読むための参考書といった性格の本である。同じ著者らの手による、植物の生活史や進化に重点を置いた教科書「教養のための植物学」(2023)の内容をベースとして、栄養器官の形態についての解説が追加され、学習を踏まえて読者が身のまわりの植物を観察できるような設計になっている。「教養」として植物学を身につけたい学部生や社会人に向け、明確な目的をもって構成されている。

本書は2部構成となっており、第1部「知る」は種子植物の生態と形態の概論で、分類体系(1章)や生活形分類(2章)から始まり、葉と葉序の形態(3章)、樹木の非同化部の形態(4章)、繁殖器官の形と機能(5章)という順で解説が進む。従来の書籍では、特定の器官(繁殖器官や冬芽)を詳しく解説したものや、検索用の模式図を掲載している場合はあっても、本書のように地上部の各器官の形態を一冊で詳しく解説した例は乏しかった。もちろん専門家の読む「植物形態の事典(1999、ラウ著/中村・戸部訳、朝倉書店)」や「植物形態学(1994、原襄著、朝倉書店)」等の教科書はある。本書第1部の内容もこれらの書物に準じていると思われるが、観察に役立つ情報に絞って要約されているぶん、非専門家でも大筋が理解しやすいと思う。また第5章では、科ごとの繁殖器官形態の特徴が図解されている。これは、初学者に科や属の形態的特徴を教授することにより、種が分類群ごとに記載されている一般的な植物図鑑を使えるよう支援する工夫である。植物の勉強を始めたばかりで同定に苦戦している人は、試みに目を通してみるとよいかもしれない。

第2部「観察する」では、第1部の内容を踏まえ、主に関東～関西の都会で普通にみられる85種の植物について観察のヒントが詳説されている。この部の構成でもやはり初学者の観察の便宜が重視されている。すなわち、分類群ごとではなく植物に出会いやすい場所(道路沿い、公園や庭、森、空き地や荒地、池や川辺など)ごとに章立てがなされ、それぞれの場所によくみられる高木・低木・草本・つるなどの植物が紹介されている。この部は「植物図鑑」的であるが、一般的な植物図鑑とは異なり、生物学的な解説とあわせて植物の文化的側面の解説が豊富である。各植物種のページには「名前の由来」という項

があり、和名や学名の命名由来が説明されている。植物によっては「人との関わり」という項も設けられ、薬用・観賞・食用・日用品等の用途や、文化上の位置づけなどが紹介されている。著者らの学識が随所に発揮され、植物に少しでも興味のある読者には、様々な発見のある読み物となっている。一方で生物学的側面、とくに繁殖形態・生態の記述も詳しい。花や果実の形態は、受粉や散布のシステムに絡めて詳しく説明されている。花や果実の形態写真は、対象種を実際に見たときの印象の再現度が高いと感じた。また昆虫の訪花の様子や、花から果実形成までの過程などは連続写真で表されており、貴重で見た目にもインパクトがある。このように、文章と写真の両面において、随所で読者に訴求する工夫がなされていると感じた。なお、繁殖関係のトピックは先行書の「教養のための植物学」の方でより詳しく解説されているので、興味が湧けばさらに学習を深めることができる。

一方で、本書は全体に親しみやすさや読了しやすさを優先しているために、説明不足な箇所も散見される。例えば5章では、大きさの違う同科の花（コウホネとスイレンなど）の写真が同じ大きさに拡大されて並置されている。紙面の美しさが優先されているのであるが、スケールもないので、初学者には実物大がわかりにくいのではと思う。また3、4章は全体に解説内容の厚みに比して、理解の補助となる図や写真が少ないように見えた。「らせん葉序」や「二回三出複葉」等の語を文章だけで理解することは、予備知識がない読者には難しいだろう。形態学用語の定義に典拠情報が欲しいと感じる箇所もあった。例えば、2章(4)節には「高木が最大高約8m以上、亜高木は3-8m、低木は0.3-3m」等々とする定義が書かれている。これはRaunkiaer (1934)の生活形分類に基づく記述だが、生物学的にはあまり普遍性のない分類なので、誤解を避ける意味で典拠があるとよかった。ただ、こうした省略はいずれも非専門家の読者への配慮であろう。

総合して、教養として植物の生態学に親しむ一步として様々な工夫が施された書籍である。植物を研究対象としながらマクロ形態学は学習してこなかった、という方には、楽しく読める参考書となりそうである。

(東京大学大学院新領域創成科学研究科 鈴木牧)

齋藤幸平 著 「マルクス解体 —プロメテウスの夢とその先」
(2023) 409pp. 講談社 ISBN : 978-4-06-531831-7 定価 2,970円

生物多様性、生態系サービス、グリーンインフラ、ネイチャーポジティブ、グリーントランスフォーメーション (GX)、それらを包含したSDGsなど、私たち生態学者を取り巻く環境はここ30年ほどで激変してきている。それは生物学の領域をはるかに超え、社会、経済、工学的な領域を巻き込んだ大きな潮

流になっている。持続可能な社会を築くうえで、そうした取り組みは必要だが、どこか引っ掛かりや危うさを感じる人も少なからずいるのではないだろうか？ 新技術の開発や経済誘導の仕組みづくりで本当に地球の危機が救えるのか、冷静に考える時期に来ている。『マルクス解体』は、まさにその疑問の所在を私たちに語り掛ける名著である。

タイトルは一見社会主義や共産主義を語るイデオロギー的な内容に思えるかもしれないが、それは全くの見当違いである。晩年のマルクスは、熱心に自然科学の諸分野を勉強し、自然環境の劣化の問題を、物質代謝をもとにした自然と人間社会との亀裂、そしてその背景にある経済資本の自己増殖性の観点から、システム論的に体系化することに腐心した。1860年代以降の膨大なマルクスノート（未刊）では、晩期マルクスが哲学から経験論にシフトし、化学肥料の過剰利用による収奪的農業、気候変動や森林破壊、生物多様性の減少について、150年以上前から警鐘を鳴らしていたことが読み取れる。西欧マルクス主義は、労働者階級の地位向上を目指すという意味で資本主義とは対立するが、技術革新と経済成長を追い求めるという点（プロメテウス主義）においては、資本主義と同根であり、環境社会主義者からは批判されてきた。だが晩期マルクスは、多くの科学者の影響を受け、生態学、地理学、農学、気候学などを学び、ついには西欧マルクス主義とは質的に異なるエコロジー社会主義を唱えるに至った。齋藤はそれを脱成長コミュニズムとして発展させている。

マルクスの主張は、物質代謝の亀裂を中心にしている。物質代謝はもともと生物体内で起こる化学反応を介した物質のやり取りであるが、ここでは人間と自然の間で生じる代謝、すなわち生態学という物質循環やエネルギー流とほぼ同じである。ただ自然と社会の間の物質代謝は、労働を介して行われることが重要である。もちろん労働は肉体労働だけでなく、人間活動のあらゆる行為をさしている。市場経済のもとで資本の増殖を唯一の目標にした資本主義（特に新自由主義）は、労働者からの搾取と同時に、自然からの搾取の上に成り立っている。それがやむことない環境劣化をもたらすという構造が、物質代謝の亀裂の本質である。

物質代謝の亀裂には、自然の循環のかく乱、空間的な亀裂（都市と農村の対立など）、時間的亀裂（資本と生態系の循環速度のギャップ）の3つをあげている。だが、資本主義はこうした亀裂を技術開発（遺伝子工学、ジオエンジニアリング、再生可能エネルギーなど）で乗り越えようとする。これを技術革新による「亀裂の転嫁」と呼ぶ。技術による解決は、ライフスタイルを根本から変える必要はないので、魅力的に見える。だが、こうした技術革新がもたらす「資本の弾力性」はやがて伸び切ったばねのように弾力性を失い、やがて取り返しのつかない惑星規模の問題（大洪水と例える）を引き起こすのである。

哲学的な議論も興味深い。物質代謝の亀裂を構造的に理解するには、デカルト的二元論でも人間と自然を平坦な繋がりで見える一元論でもない、方法論的 二元論が必要であると述べている。社会には自然に存在しない新たな性質や創発特性があるため、両者をまず意図的に分離し、そのうえで再統合するという二重の規定で考察している。その点、IPBES などの社会—生態システムの枠組みや、近年のマルチスピーシーズ人類学は、平坦な一元論的な捉え方に近いように思う。

晩期マルクスの思想は、クロフォード・ホリングのレジリエンス理論（社会の本質的な変革（transformative change）により生み出される新しい安定領域の模索）や、ハーマン・デイリーの定常経済から持続可能な社会を目指す生態経済学の思想、最近ではジェイソン・ヒッケルが唱える「ラディカルな潤沢さ」の世界との同一性が随所にみられる。私たち生態学者も、いまやポスト資本主義社会の在り方を本気で考える時期に来ている。本書は哲学系の用語が多く、やや難解ではあるが、一般向けの「人新世の資本論」では詳しく論じられてこなかった歴史的記述や深い洞察に満ち溢れている。社会経済系の研究者よりも、システム論的な思考に慣れている生態学者のほうが、晩期マルクスや斎藤の主張の本質を理解しやすいかもしれない。本書の唯一の難点をあげるとすれば、マルクスの主張とその他の学者の主張、さらに著者である斎藤の主張が入り組んで展開されていることにある。そのため、上記の記述も正確に切り分けられていない可能性もあるが、その点にご容赦いただきたい。環境問題に関心のある生態学者はもちろん、行政や企業などで実務に関わっている方々にも是非ご一読していただきたい。

なお、本書でたびたび登場する環境社会主義者のフォスターらが編集している雑誌“Monthly Review”には、リチャード・レビンスやリチャード・ルウォンティンなど、生態学や進化生物学の巨匠たちの論説も紹介されており、生態学者のエコロジー社会主義への哲学的貢献がうかがえる。そのあたりの話は別稿で論じる予定である。

（東京大学 宮下 直）



京都大学
生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel:(077)549-8200 (代表), Fax:(077)549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2025年 1月号 京都大学生態学研究センターニュースのご紹介

- センター員の紹介
- 2024年度共同利用・共同研究事業の活動報告
- 研究ハイライト
- その他のお知らせ

「研究ハイライト」では、
プレスリリースされ、京都大学ホーム
ページ等に掲載された研究成果を
紹介しています。

センターニュース メール配信登録のお願い

生態学研究センターニュースは
バックナンバーを含め、センター
ホームページの以下のURLからご
覧いただけます。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/newsletter.html#ct3>

発行のお知らせメール配信の登
録、配信先の変更、配信停止等
をご希望の場合は、インターネット
上の以下のフォームより必要事項
のご入力をご希望いたします。

<https://ws.formzu.net/fgen/S75832635/>



- 01) 世界自然遺産小笠原樹木の光合成酵素ルビスコのCO₂固定特性の種多様性と進化的制約
DOI: 10.1111/nph.19820 石田 厚 (京都大学生態学研究センター・教授)
- 02) 機械学習を用いた野外環境下における植物のフェノタイプング
Nature Communications 14: 5792 工藤 洋 (京都大学生態学研究センター・教授)
- 03) シカの森林被害は土壌微生物にも波及する 一大規模生態系操作実験と環境DNA分析の融合—
Environmental DNA 5(6): 1732-1742 門脇 浩明 (京都大学白眉センター・特定准教授)
- 04) 「湖」へ回遊したサケ科魚類における回遊パターンの多様化と大型化
DOI: 10.1111/oik.10981 中西 勇太 (京都大学生態学研究センター・修士課程 (研究当時))
- 05) 富栄養化と地球温暖化の琵琶湖生態系への影響—湖底に住む生き物は何を物語るか—
DOI: 10.1080/20442041.2024.2388338 成田 哲也 (元京都大学生態学研究センター・教員)
- 06) 自然変動環境下における植物の概日時計と環境シグナルの統合メカニズム
DOI: 10.1073/pnas.2402697121 西尾 治幾 (滋賀大学・講師、
京都大学生態学研究センター・連携講師)
- 07) 毎週調査で明らかになった常緑植物の葉群動態と老化制御の季節的な切り替えについて
Nature Communications 15: 4719 湯本 原樹 (京都大学生態学研究センター・特定研究員)
- 08) 寄生虫ハリガネムシの「延長された表現型」に対する進化的トラップの可能性
DOI: 10.1093/pnasnexus/pgae464 澤田 侑那 (京都大学生態学研究センター・修士課程 (研究当時))

2025年度共同研究bの申請について

毎年度、生態学の基礎研究の推進と生態学関連の共同研究の推進を目的として、共同研究と研究集会・ワークショップを公募しております。

共同研究b (随時募集、予算措置なし)の申請は、Googleフォームにてお願いします。

申請方法の詳細はセンターホームページの以下のURLをご確認ください。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/contents.html>

問い合わせ先

京都大学生態学研究センター 共同利用・共同研究拠点担当
電子メール: kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp
電話: 077-549-8200

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9～12月に請求します。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は、前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会費の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費*	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員（一般）	9500円	○	○
正会員（学生）	4500円	○	○
賛助会員	20000円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。詳細は[ウェブサイト](#)をご覧ください。

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 投稿権利は会員に限定されません
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- ・日本生態学会誌 2,000円
- ・保全生態学研究 2,000円

【非会員に向けた学会誌（冊子体）定期購読料】

- ・日本生態学会誌 5,000円
- ・保全生態学研究 5,000円

問合せ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@as.bunken.co.jp

Tel: 03-6824-9381 Fax: 03-5227-8631